



TITLE:

後漢魏晉注釋書の序文

AUTHOR(S):

古勝, 隆一

---

CITATION:

古勝, 隆一. 後漢魏晉注釋書の序文. 東方學報 2001, 73: 1-48

ISSUE DATE:

2001-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66852>

RIGHT:

## 後漢魏晉注釋書の序文

古 勝 隆 一

### 目次

序	
第一章 後漢魏晉の注釋家の序文	
第二章 劉向の叙録	
第三章 劉向叙録の影響力	

第四章 後漢以降現れた新形式の注釋書	
第五章 『楚辭』の序文をめぐって	
結	

### 序

現行『十三經注疏』が古い注釋として採用している注の殆どは、後漢末から魏晉にかけて成立した。<sup>①</sup>『經典釋文』や『隋書』經籍志からも知られるとおり、この時期には古典の注釋が特に集中的になされた。それらの注釋の多くは既に失われたが、現存の注釋書及び佚文から判斷すると、その時代の注釋書には注釋家の手になる序文が附されていたものが相當數あったと想像される。

傳存する序文についていえば、その多くは既知の資料であり特に目新しい資料というわけではない。注釋書の序文のうち、特に重要なものについては積極的に注釋研究、思想研究上、活用されてきたといってもよい。しかしながらこの時期に書かれた序文を集めてその發生を論じ、また序文がどのような形式をとっていたのかを體系的に論じたものは多しとしないであろう。本稿では、注釋書の序文の中でも後漢から魏晉にかけて成立したものを特に論ずる。

そもそも、「後漢魏晉」の、しかも「注釋家が撰んだ」序文というごとき枠で括られる複數の文章は、何らかのまとまりをなしているのか。そして假にそれらの序文をひとまとまりとして考える事に幾らかの意義があるならば、その意義とは何であるか。これらは從來問題とされる事がなかった。ここではまず暫定的で單純な見通しのみを示す。

一、注釋家の序文に對象を絞るのは、それがいわゆる「自序」とは懸隔があるからである。<sup>②</sup>『史記』の太史公自序、『漢書』の班固序傳にせよ、または『論衡』の自紀篇にせよ、いわゆる「自序」が本文の一部となつて書中の一篇をなすのに對し、注釋家が書いた序は序自體が一篇をなすわけなく、本文に對して附録的に加えられている。

二、注釋家の序文が明らかになかたちで歴史に現れるのは、後漢のある時期以降なので、時代的には後漢をその始まりとみる。

三、また同じく注釋書の序文といつても後世のものとは同一視できない。古注として知られる古典注釋は、後漢以來蓄積され東晉時代にはぼ出揃つた。よつて東晉時代を下限とする。<sup>③</sup>

ただしこの見通しは飽くまで假のものであり、この時期の注釋家の序文が共通した何かを備えているのか否かは本論にて検討するつもりである。

後漢魏晉の注釋家の序文を考察するといつてもそれを總體として扱うのか、また扱うことに如何なる意義があるかという深刻な問題が存在するにも関わらず、印象的にいつて、この時期の注釋書の序文は互いに似通っている。さらに同

じような印象に基づいていうならば、その時期の注釋書の序文は、前漢末に劉向父子により行われた校書の記録、「叙録」と似ている。本稿では兩者の類似が何であるのかを考え、その類似をあらしめている學術史的な背景を探りたい。

## 第一章 後漢魏晉の注釋家の序文

後漢以降の注釋書を論じる前提として、後漢の前時代である前漢の状況を一瞥しておきたい。前漢においても經書の注解が盛んに行われていたことは『史記』『漢書』などからも明らかであり、この時代、注解の對象が主に六藝の書、すなわち經書にあったことは疑いない。ただし前漢時代に作られた經書の注釋は、のちの注とはかなり様式の異なるものであったと思われる。

第一に書物の體裁からいうと、注釋が經文から獨立して單行していたらしい。孔穎達『毛詩正義』は、注を經に附して一つの本に兩者を合わせて書くという體裁をとる初期の例として、後漢の馬融による『周禮』の注を舉げる。馬融以前にこのような形式の注釋がまったく存在しなかったかどうかは證明できないが、その頃によく經と注とが配合された注釋書の形式が現れてきたのではないかと考えられる。これについては後述する。

第二に、注釋家が注釋をした場合、彼が自身の責任において、その序文を書くという習慣が後漢以降に普及したが、前漢時代にはそれがなかったと推測される。本稿においては主にその當否について考證し、その理由を歴史的に考察したい。先秦時代から前漢までの時期にも、確かに學者は「序」を遺した。その例としては、『詩』の大序及び小序、『書』の書序、そして『易』の序卦傳が舉げられる。これらの序の作者が誰なのか、後漢以降にも議論が繰り返され、詩序については子夏と毛公が書いたと鄭玄『詩譜』では見なし、書序と『易』序卦傳については孔子撰ではないかというのが孔穎達『五

『經正義』の見解である。孔子や子夏が書いたというのは歴史的事實ではなく、その書の傳授の過程で何れかの人物が附加したものと考えられる。これらの序文は一體どの學者が書いたものなのか、序文中にまったく痕跡が遺されておらず特定しかねる。またこれらの序は、經文を解説する役割を果たしてはいるが、書物の構造上、經文とはつきりとは區別できなくなっている。要するに、特定の學者が自己の責任において執筆した文というよりは、おそらく先秦時代から前漢頃までの歴史の中で、複数の學者たちの手を経て次第に形成され蓄積され、いつしか經文の一部に取り込まれてしまったような文章であるといえる。<sup>④</sup>また、特定の注釋家の責任において書かれた序文のうち、前漢時代に書かれた事が明らかなものは、現在のところ知られていない。<sup>⑤</sup>

このように經書の注釋について、その序文という點から、前漢的な注釋と後漢以降の注釋とを對立的にとらえる事が一應可能ではある。では後漢から魏晉にかけての序文の一般的な姿は如何なるものか。五經注釋書の序文のうち殘闕がないものは少ないので、ここでは後世の四部分類の經部に屬する書物の典型的な序文として、ほぼ完全な形で傳わっていると考えられる、三國吳の韋昭（二〇四—二七三）の『春秋外傳國語』序をまず取り上げる。全體は長大なので、内容を要約する。

かつて孔子は『春秋』を完成させ、左丘明はそれに基づき聖なる王者の義を明らかにした。彼の『春秋左氏傳』はまことに偉大で、天才的、博識なる著述家といふべきである。彼はそれでも表現したいことを伝えきれなかったので、穆王の時代から「魯、智伯の誅を悼む」までの歴史を、諸國の興廢や名言名句その他を織り込んで『國語』を著したのである。この書物は直接『春秋』を對象としたものではないので、（春秋）「外傳」「國語」と名付けられた。

この書の傳授は、秦の焚書により衰えはしたが、その後賈誼、司馬遷、劉向、鄭衆、賈逵などの祖述により、その大義がほぼ明らかにされた。建安、黃武年間に活躍した虞翻と唐固も碩儒であり、賈逵の業績をもとに注釋を書いた。わたくしは末學の身ながら、先人たちの注釋を足がかりに内容の是非に思いをいたしたところ、心中やや得るところ

ろがあった。世間にはこの書の多くの注釋が流通しており、初學者が混亂するだろうと考え、新しく注釋を施すことにした。賈、虞、唐氏の長所を取り入れ、さらに自己の見解を加え、五經、『春秋左氏傳』、『世本』、『爾雅』などによって考證し、三百七件について解釋した。諸家の説は紛糾しておりすべて載せれば煩雜になるので事實に近いもののみ取り上げたが、それでも煩瑣だと感じてあやしむ向きもあるう。讀者にはこの事情をご了解いただきたい。

韋昭の序は以上のような内容である。ここには、左丘明が『國語』を書くに至った経緯、『春秋外傳國語』という書名について、それが「外傳」と呼ばれる理由の説明、秦の焚書から前漢の賈誼や司馬遷、ついで後漢の賈逵から漢末三國初の虞、唐氏に至るまでの『國語』注釋の歴史が述べられ、韋昭自身がこの書物に注釋した経緯が記されている。全體として、注釋の対象となる書物の成立、傳授の歴史を記し、その歴史の中における注釋家自身の位置を、人名、書名などの固有名詞を明らかにしつつ述べたものである。そして序末には讀者に向けての呼びかけがある。そのような構成となっているのである。

もう一例、後世の子部儒家類に屬する書物の注釋のうち、後漢の趙岐（？—一〇二）が書いた「孟子題辭」を見ておきたい。この文章は「題辭」と名づけられてはいるものの、内容的に見ればやはり序文であると考えて問題ない。これも煩を避けて要約する。

この「孟子題辭」という一文は、『孟子』の本旨や表現について記すためのものである。「孟」とは姓で、「子」とは男子の通稱である。孟子が著したので書名も『孟子』という。

孟子は鄒の人で、名は軻、字は未詳。鄒は春秋の邾子國で、現在の鄒縣である。孟子は天性の才に恵まれたが、はやくに父を失い、孟母三遷の教えを受けた。成長してからは孔子の孫、子思に師事し儒學を治め、殊に『詩』『書』に長じた。彼は戰國期の混亂を救うため諸國に遊説したが、結局容れられなかった。そしていまだ劉漢興隆の時期では

ないことを悟り、著作を後世に伝えることを思い立ち、七篇、二百六十一章、三萬四千六百八十五字の書物をまとめたのである。なお『孟子』には性善・辯文・說孝經・爲正からなる「外書」四篇があるが、これは内篇と異なり孟子の眞作ではなく後世の學者が假託したものと考えられる。

その後、孟子の後繼者は秦の坑儒で斷絶したが、『孟子』は諸子の書として扱われて滅びなかった。前漢の孝文帝のころに一度は孟子博士が置かれた。博士官はのちに廢されたが、それでも今に至るまで經學の議論においてはこの書を引いての證明がおこなわれている。『孟子』が著されて以來五百年、その傳承者も多くある。私はというと少年時代から學問を始めたものの、漢末の混亂に巻き込まれて流浪の身となってしまい、いまは著述によって心の安らぎを得ようとしている。儒家の書では『孟子』こそを注釋の對象としたい。そこで自分の聞き知ることを述べて注解し、十卷の注をなした。自分では是非の判斷がつかぬところもあるので、後世の賢者に補正を願うのである。

以上が趙岐「孟子題辭」の主な内容である。『孟子』という書名の説明、孟子の傳記、當時通行の『孟子』に含まれていた「外書」に對する辨偽、趙岐自身が注釋をするに至った經緯などがまとめられる。そして最後は讀者に對して、この注釋の是非を判斷してくれるようにと呼びかけているのである。

趙岐「孟子題辭」を見ても、『孟子』という書物の成立の經過、その後の變容などの歴史が示され、それに對する注家趙岐の關與が記されている。以上二つの例を見る限り、後世の序跋が讀書雜記的であったり、その書物にことよせて自己の思想を述べたりするのは違う體裁であることが知られる。

しかし、この二例のみから當時の注釋家の序文一般をいう事はできぬであろう。滅んだ資料はいたし方ないとして、後漢から魏晉にかけての注釋家が記した序文は、一體どれくらい今日に傳わっているのか。それを私に〔表一〕としてまと

め、下に掲げた。これらの序文にはどのような事項が記されているかを検討すると、同一の形式で書かれているとまでは言い切れぬものの、それぞれの序文が相當に似通った記述内容を含んでいる事を見て取るのである。

いま試みに、序文の中にどのような要素が含まれているのか、AからGまでの七項目について確認した。項目の内容は、次の通りである。

- A 「原著が著された経緯」
- B 「原著者の傳記」
- C 「原著の書名に關する説明」
- D 「傳承や注釋の歴史への言及」
- E 「自身による文獻整理や辨偽の記録」
- F 「注釋の動機についての説明」
- G 「讀者に向けてのメッセージ」

これらの項目は、この時期の序文に一般的に見られる要素を私なりに抽出し、整理したものである。このようにまとめると、この時期に書かれた序文においては、その書物をめぐる學術史的な記述を中心に、注釋家自身の關與をも合わせて記すという形式が普及しており、その要素も互いに似通ったものであることがおよそ把握される。先ほど引用した韋昭「國語序」と趙岐「孟子題辭」が、少なくともこの時期において孤立した形式の序文ではないことが知られる。

このAからGまでの項目を、高誘「淮南鴻烈序」について確認したい。

淮南子名安、厲王長子也。長、高皇帝之子也。

淮南子は名を安といい、厲王長の子である。長は漢高祖の子である。



〔表二〕 後漢魏晉注釋家が著した序文一覽（四部分類）

序文の作者	要素	序文の所在
△『周易』虞翻序	A	『三國志』吳書一二注
△『周易』張璠序	DEF	『北堂書鈔』一四七、『經典釋文』叙錄
○『古文尚書』孔安國序	E	本書
△『尚書』馬融序	ACDEFG	『尚書』堯典・泰誓序正義
△『尚書大傳』鄭玄序	DE	『玉海』三七等
△『周官禮』馬融序	ABCDE	『序周禮廢興』（『周禮』疏）
△『周官禮』鄭玄序	D	『序周禮廢興』（『周禮』疏）
△『周官禮異同評』陳劭序	ACD	『經典釋文』叙錄
○『春秋左氏經傳集解』杜預序	D	本書
○『春秋左氏經傳集解』杜預後序	ACDEF	本書
○『春秋公羊解詁』何休序	DEF	本書
○『春秋穀梁傳』范寧序	A	本書
△『春秋釋例』顧容序	DE	『太平御覽』六一八
△『解疑論』戴宏序	D	『春秋公羊傳』序疏
○『春秋外傳國語』韋昭序	D	本書
○『古文孝經』孔安國序	ACDEFG	本書
△『孝經』鄭玄序	ACD	本書（和刻本）
○『集解論語』何晏序	FG	『大唐新語』九、『玉海』一一等
○『孔子家語』王肅序	C	本書
○『爾雅』郭璞序	DD	本書
○『方言』郭璞序	DEF	本書
○『漢官解詁』胡廣序	DEF	『續漢書』百官志注
△『百官箴』胡廣序	A	『太平御覽』五八八
○『山海經』郭璞序	FG	本書

〔略 號〕

○Ⅱ序文がほぼ完全にのこっていると考えられるもの（網掛けにて強調）  
 △Ⅱ残缺しているものか、他書に断片的に引用されているもの

この時期の序文に共通する要素

- |   |                 |   |              |
|---|-----------------|---|--------------|
| A | 原著が著された経緯       | B | 原著者の傳記       |
| C | 原著の書名に關する説明     | D | 傳承や注釋の歴史への言及 |
| E | 自身による文獻整理や辨偽の記録 | F | 注釋の動機についての説明 |
| G | 讀者に向けてのメッセージ    |   |              |

\*書名はおよそ『隋書』經籍志に基づいて配列した。

\*「序文の所在」とは、現在その序文がどの書物に見えるかを記したものである。序文が當該の書物の現行傳本に附隨している場合は「本書」とした。序文が現行傳本に附されておらず、他書に見える場合は何に見えるかを記した。

- 『孟子』趙岐序
- 『揚子太玄經』陸績序
- 『揚子太玄經』范望序
- 『徐氏中論』任氏序
- 『列子』張湛序
- 『莊子』郭象序
- 『呂氏春秋』高誘序
- 『淮南子』高誘序
- 『尹文子』仲長氏序
- 『孫子兵法』魏武帝序
- 『周髀』趙嬰序
- 『九章算術』劉徽序
- △『玉置針經』（佚名序）
- 『離騷經』班固序
- 『楚辭』王逸序
- 『蜀都吳都賦』劉逵序
- 『三都賦』衛權序

A B C	E F G
A	D E F G
A B	D E F G
A B	F G
D E F	
B	D E F
A B	D E F G
A B C D E F G	
A B	D E F
A B	D E F
A	D E F G
A C D E F G	
A B	

- 本書
- 本書（范望注本卷首）
- 本書
- 本書
- 本書
- 本書
- 本書（高山寺藏舊鈔卷子本）
- 本書
- 『太平御覽』二七〇。本書（道藏本）
- 本書
- 『太平御覽』七二四
- 本書
- 本書
- 『晉書』九
- 『晉書』九

これは『淮南子』編集の中心人物である劉安の傳記であり、B要素に當たる。

天下方術之士多往歸焉。於是遂與蘇飛、李尚、左吳、田由、雷被、毛被、伍被、晉昌等八人、及諸儒大山、小山之徒、共講論道德、總統仁義、而著此書。

天下の方術の士が劉安のもとに多數集まるようになった。そこで蘇飛、李尚、左吳、田由、雷被、毛被、伍被、晉昌の八人、また大山、小山といった儒者たちとともに、道德を論じ仁義をとりまとめて、『淮南子』を制作した。

これは『淮南子』成書の経緯であり、A要素に當たる。

其義也著、其文也富、物事之類、無所不載、然其大較歸之於道、號曰『鴻烈』。鴻、大也。烈、明也、以爲大明道之言也。

この書の意圖は明確で文藻はゆたかであり、あらゆる物事を載せ盡くしたもののだが、その要旨は道家に歸し、『鴻烈』と名づけられた。「鴻」とは大いに、という意味、「烈」とは明らか、という意味で、大道を大いに明らかにしようとしてつけられたことばである。

これは『淮南鴻烈』の「鴻烈」の二字を説明したもので、C要素に當たる。

先賢通儒述作之士、莫不援采以驗經傳。……光祿大夫劉向校定撰具、名之『淮南』。

前賢、通儒、述作の士は、みな『淮南子』を用いて經傳の内容を検證した。……光祿大夫劉向がこの書を校定してしたため整えて、『淮南』と名づけた。

これは『淮南子』を學者たちが利用してきた歴史を述べ、また劉向による校定に言及したものであり、D要素に相當する。建安十年、辟司空掾、除東郡濮陽令、觀時人少爲『淮南』者、懼遂凌遲、於是以朝輔事畢之間、乃深思先師之訓、參以經傳道家之言、比方其事、爲之注解、悉載本文、并舉音讀。

建安十年、司空の掾に召され、東郡濮陽の令となったが、當時の人々があまり『淮南』を讀まないで廢絶してしまふのではと心配し、政務の暇を見つけては先師の教えに深く思いを致し、經傳や道家の書をも參照して、『淮南子』の内容と突き合わせて訓釋を施し、經文をすべて書いて、さらに字の讀みをも示した。

これは高誘自身が注釋をするにいたった動機と經緯を詳しく書いたもので、F要素に當たるであろう。

典農中郎將并揖借八卷刺之、會揖身喪、遂亡不得。至十七年、遷監河東、復更補足。

典農中郎將の并揖が私の注釋八卷を借り出して拔粹したのだが、彼が亡くなったのでそのまま私の注釋も戻らずじまになった。建安十七年、私が河東を監するようになってからあらためて注釋の闕を補って完成させた。

これは自分自身の注釋書の殘闕を補完した次第を述べたものであるが、高誘の「補足」は『淮南子』傳本の散逸を防いだことにもなったので、注釋家による古籍整理の記録としてE要素と見なし得る。

唯博物君子覽而詳之、以勸後學者云爾。

博物の君子にこそ本書を見て事情をお察しただき、後世の學習者に傳えていただきたいものである。

これは讀者に向けての傳言であり、G要素に當たる。以上のように見ると、この高誘「淮南鴻烈序」は、私の舉げた七要素すべてを満たすものであり、また同序にはそれ以外の内容が殆ど見られない。現存の資料から見る限り、全要素を満たす序文は少數に過ぎないが、この高誘序は決して當時の序文の常識からかけ離れた例というわけではなく、ある意味では後漢魏晉の注釋家の手になる序文の典型ともいえよう。

以上舉げた例のうち、「孟子題辭」の撰者趙岐と、「淮南鴻烈序」の撰者高誘はともに漢末に生を受け、「國語序」を撰んだ章昭は三國吳の人であった。漢末から三國にかけて注釋家が序文を書く習慣が定着し、またそれらの内容を見ても、注釋書の序文が同時期において互いに似通ったものであった事が分かる。

このような習慣の起源については後述するつもりであるが、一方、注釋書の序文が上記の如き姿を維持したのは何時までか。等しく注釋書の序文といっても、漢魏の「注」と注釋形態を異にするもの、たとえば「論」「義疏」の序などは同日には論じられない。というのは、本稿では序文のみを切り取ってその内容を検討するだけではなく、序文がその書物とどのような關係を持ち、書物全體の中で如何に機能したかという點にも着目したいからである。<sup>⑦</sup>それゆえ先ほど、後漢から東晉までの注釋書の序文を總體として取り上げることが提案したのであった。東晉時代は、經學史でいう「古注」が出そろった時期であるが、經學上の「古注」のみならず、他の古典についてもその「注」が一應完備されてきた時期でもある。その東晉の注釋書の序文として范寧「春秋穀梁傳序」を〔表一〕で見ると、A、D、Eの要素が、また郭璞「爾雅序」を見ると、A、D、F、Gの要素がそれぞれ確認できる。やはり後漢以來の注釋書の序文と共通する點が多いように思われるのである。後漢から東晉にかけて成立した注釋書に附せられた序文群は、共通する學術史的基盤に依據して執筆されたものであると推測しておく。

以上のような基準によって後漢魏晉注釋書の序文の眞僞を辨じ得る例として、『莊子』の場合を挙げておきたい。宋版以降の『莊子』刻本の卷首に見える、西晉の郭象の撰とされる所謂「南華眞經序」は次のように始まる。

夫莊子者、可謂知本矣。故未始臧其狂言、言雖無會而獨應者也。（舊題郭象撰、載通行本卷首）

莊子という人物は、本質を理解していたといえよう。さればこそ奇言を包み隠さなかったのであり、その言葉は他者と投合しはせぬがそれ自體正しいのである。

この一文は、『莊子』の思想をパラフレーズしてまとめたものであるが、歴史的な記述がまったく含まれない。ここには「莊子」以外、學術史上の固有名詞——先行する注釋家の名前、書物の篇名など——は見えず、また本文の執筆者が『莊子』と

學術的に關與した事跡が記されない。この序文は、内容から判斷する限り同時期の他の注釋書の序文と類似しない。

一方、京都高山寺には鎌倉時代抄寫の『莊子』郭注殘本が藏され、同書の終卷に當たる天下篇が遺る。この卷子の末尾には通行本に見えない一文があり、これが從來、「莊子後序」「莊子後記」などと稱されることが多かった。この一文に對して、上記の七要素の有無を調べると、そのうちの四要素が存している事が分かる。この文は、形式的に見て同時期の注釋書の序文と類似しており、形式面から考えても眞の郭象「莊子序」ではないかと思われるのである。<sup>(8)</sup>

## 第二章 劉向の叙錄

以上のような形式をとる注釋書の序文はどのように歴史に登場してきたのか。上述の如く、學者が自己の名前を明らかにして序文を執筆するのは前漢以來の經書傳授の傳統ではなく、注釋書の序文の文體は後漢の注釋家たちによって形成されていった。彼らが序文の文體を作る際、確實な規範があったとは斷定できないが、いくつかの文章から影響を受けて形成されていったと考えられる。

上述の『詩經』や『書經』の序の影響もあろうし、そして『史記』太史公自序の強い影響も確實にあると思われる。しかし同様に見落とすことができないのは、前漢の末に成帝の命を受けて大がかりに行われた、劉向劉歆父子による書籍整理の影響である。

劉向らが書物の校訂を終える度に、叙錄を撰述して奉ったことは『漢書』藝文志から明らかである。しかし、その具體的な内容については、清末から民國時代にかけて大きな進歩のあった目錄學研究によって始めて大畧がとらえられた。<sup>(9)</sup> 民國時代の目錄學者の姚名達は、劉向の叙錄の義例を八つに分けた。<sup>(10)</sup>

- 一 「著録書名與篇名」(書名と篇名の著録)
- 二 「叙述讐校之原委」(校讐のいきさつの叙述)
- 三 「介紹著者之生平與思想」(著者の傳記や思想についての紹介)
- 四 「説明書名之含義、著書之原委、及書之性質」(書名の意味、著述のいきさつ、および書物の性質についての説明)
- 五 「辨別書之眞僞」(書物の辨僞)
- 六 「評論思想或史事之是非」(思想や歴史事實の是非についての論評)
- 七 「叙述學術源流」(學術の源流の叙述)
- 八 「判定書之價值」(書物の價值の判定)

劉向「叙録」にどのような記載事項が含まれていたかを知るのに、姚氏のこの分類は大筋において適切であると思われる。ここではまず姚名達の分類の第三點である「著者の傳記や思想についての紹介」のうちでも、特に著者の傳記に関する記述に着目したい。

そもそも劉向叙録はもとも校訂の對象となつた個々の書物に附されて皇帝に奉られたものであるが、のちにそれらが集められて一つの書物になった。それが『別録』であるが、同書は唐末に滅んだとされる。いま清朝の姚振宗の輯本により、著者の傳記に関する記述を搜すと、これはきわめて多く見受けられる。「韓非子叙録」には次のようにある。

韓非者、韓之諸公子也。喜刑名法術之學、而其歸本於黃老。非爲人吃、不能道說、而善著書。與李斯俱事荀卿、斯自以爲不如非。

韓非は、韓の諸公の子である。刑名法術の學を好んだが、その本質は黃老思想に基づいている。彼はもともと口べたで話することが不得手だったが、書物を書くことには長けていた。李斯とともに荀子に師事したが、李斯でさえも

韓非にはかなわないと自覺していた。

このように傳記を記したものは『別錄』佚文中、枚舉にいとまない。余嘉錫によれば、作者の傳記を記すという行爲自體は先秦時代以來の書籍整理の傳統に連なるものであった。<sup>12)</sup>たとえば『莊子』という書物の中に莊周の傳記的な事項が見えるのは、その書物を傳えた人々が附加したものに相違あるまい。

ただし劉向「叙録」がそれと異なるのは、「叙録」が劉向自身の責任においてその記事が書かれたことを明示しており、その「叙録」が書物の本文に紛れないように配慮されている點である。たとえば、「晏子叙録」に「護左都水使者光祿大夫臣向言」とあり、また「孫卿新書叙録」にも同じ記載があり、「臣向」すなわち劉向の責任が明記される。<sup>13)</sup>

何故、劉向において始めてそれが可能であったのか。先秦時代の學術は傳承により傳わっており、傳承の過程でその學派に屬する人々が内容を増補してゆく學術的習慣があったため、附加されたものが本文の一部になり、書物の内容が次第に變化して量も増えるという狀況があった。これに對し劉向校書においては、校書の對象となる書物と自己の學問が明確に區別されており、いわば書物の外部からその書物を解説することができた。こうして書物の内容を説明する際、自己の責任において作者の傳記を記すという行爲が、劉向の「叙録」において確立したと説明することができよう。そのような意味において「叙録」は新しい文體であった。なお既に紹介した「韓非子叙録」は、司馬遷の『史記』の韓非子傳をほぼそのまま踏襲したものであり、傳の内容自體には新しさが全くないが、これは、劉向の時代には『史記』の記述内容がまだ常識とはなっておらず、劉向はそれ故あらためて列傳の一部を記した、と説明されている。<sup>14)</sup>

さてこの傳記という要素は、後漢魏晉の序文の中にも見える。「表一」から分かるように、原著者の傳記に當たるB要素が、とりわけ子部の序文に數多く確認できる。既述の通り、高山寺本の末尾に付す一文は郭象「莊子序」と考え得るものであるが、その末に次のようにある。



太史公曰「莊子者、名周、宋蒙縣人也。曾爲漆園吏。與魏惠王、楚威王同時者也」。(高山寺藏舊鈔卷子本末尾)

司馬遷はいう、「莊子は名を周といい、宋の蒙縣の人である。漆園の役人だったことがある。魏の惠王や楚の威王と同時代だった」。

これは「太史公曰」といって、明確なかたちの『史記』の引用である。<sup>15)</sup>

また曹操の「孫子兵法序」には次のようにある。

孫子者、齊人也、名武。爲吳王闔閭作『兵法』一十三篇、試之婦人。卒以爲將。(據『太平御覽』卷二七〇)

孫子は齊の人であり、名を武という。吳王闔閭のために『兵法』十三篇を撰び、試しにその兵法で女性を練兵した。

吳王はついに彼を將軍に任命した。

これも『史記』の記事を節畧したものである。<sup>16)</sup>しかしながら、曹操や郭象の生きた三國や西晉といった時代において、いまだ『史記』が普及しておらず讀者にとって未知の資料であり、それ故に説明が必要とされたのであろうか。それは考え難い。曹操や郭象が『史記』を引用しているのは、劉向叙録の何らかの影響を蒙り、書物を解説しようとする場合に、作者の傳記を書くという習慣が定着していたからではあるまいか。

またさらに姚名達が叙録の特徴として擧げている第七點「學術の源流を叙述する」という項目について検討してみたい。これは、書物の傳授に關しての記述が叙録中にあるという内容だが、漢魏晉の序文にもそれに相當する要素があり、「表一」のDに相當する。そして「表一」を見ると、これが各序文にもっとも廣く見られる要素であることが分かる。注釋家の序文中にそのような記述がある實例としては、先ほども擧げた韋昭「國語序」に次の通りあるのを見ておけば十分であろう。

遭秦之亂、幽而復光、賈生・史遷、頗綜述焉。……至於章帝、鄭大司農爲之訓注、解疑釋滯、昭晰可觀。至於細碎、

有所闕畧。侍中賈君、敷而衍之、其所發明、大義畧舉、爲已瞭矣。

秦の焚書という打撃を被り振るわなかったこの書は再び甦り、賈誼や司馬遷がずいぶんと説を唱えた。……。後漢章帝のころには、大司農鄭衆がこの書に訓釋を施して疑義を解明し、明確に書物の意がとらえられるようになった。ただし細部については説明が省かれたところがある。侍中賈逵はそれを敷衍し、彼が闡述した部分については書物の大義がほぼ備わり、すでに明かされたといえよう。

一方、「學術の源流の叙述」という姚名達の指摘に沿って劉向が「叙録」中に書物の傳授に關して記述した例を探ると、次の「列子叙録」が挙げられる。それは『列子』の傳承が途絶えた事、そして司馬遷が列子の列傳を立てるに及ばなかった理由を述べたものである。

此書頗行於世、及後遺落、散在民間、未有傳者。且多寓言、與莊周相類、故太史公司馬遷不爲列傳。〔『列子』卷首に見える「列子叙録」〕

この書物はかなり流行したのではあるが、後に失われて民間に散らばり傳承する者がなくなった。そのうえ寓言が多く莊周の書と大差ないので、太史公司馬遷は列子の列傳を立てはしなかった。

また「尙書歐陽經叙録」から知られるのは、歐陽氏が傳えた『尙書』について、武帝のころ新發見されて献上された泰誓篇に對し、數ヶ月のちには解説が加えられたという傳承の歴史である。

武帝末、民有得「泰誓」於壁內者、獻之、與博士使讀說之、數月皆起傳以教人。〔『尙書』孔序「裁二十餘篇」正義引「別錄」武帝時代の末、壁の中から「泰誓」を發見して献上した民がおり、それを博士にあずけて解釋させたところ、數月後には彼らはそれぞれ傳をつくって教育に用いるようになった。〕

以上、姚名達の「三、介紹著者之生平與思想」が「表一」のB要素に、「七、叙述學術源流」がD要素に相當する事のみ述べた。その他については、姚氏の「一、著錄書名與篇名」がC要素に、「二、叙述讐校之原委」がF要素に、「四、說明書名之含義、著書之原委、及書之性質」がA及びC要素に、「五、辨別書之眞僞」がE要素にそれぞれ大體相當することだけ指摘しておく。

なお姚氏のいう「六、評論思想或史事之是非」、そして「八、判定書之價值」は、ともに劉向が校讐の對象とした書物に對して下した價值的な判斷を指すのであるが、漢魏以降の注釋家の場合、その多くは注解の對象となる書物に積極的な意義を認めるからこそ取り上げるので、特に注釋の對象となる書物への批判は一般的には見受けない。ここに書物への關わり方における、兩者の差異のひとつを認めることができるであらう。また逆に「表一」のG要素「讀者への呼びかけ」は、劉向「叙錄」には指摘できない。このあたりが兩者の要素の違いであるが、大筋において兩者が類似した内容を含んでいると見て大過あるまい。

### 第三章 劉向叙錄の影響力

以上、後漢以來の注釋書の序文と劉向叙錄の文章中の要素を比較し、その類似點を指摘したが、單に類似しているといふだけで兩者の影響關係を論じることはできない。劉向の「叙錄」はといった後漢以降の學術界でどこまで浸透し、學者たちにどのように受容されたかを考えたい。「叙錄」の成立と流通の経緯について、『漢書』藝文志の篇首序にいう。

成帝時、以書頗散亡、使謁者陳農求遺書於天下。詔光祿大夫劉向校經傳・諸子・詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技。每一書已、向輒條其篇目、撮其指意、錄而奏之。

成帝の時、書物がかなり散逸したので謁者の陳農に命じて殘存する書物を國中から集めさせた。そして光祿大夫の劉向には經傳・諸子・詩賦の書を、步兵校尉の任宏には兵書を、太史令の尹咸には數術の書を、侍醫の李柱國には方技の書をそれぞれ校讐させた。ひとつの書物の校讐を終える度に、劉向は篇目を整理して、その書物の趣旨をかいつまんで、それをしたためて奏上した。

引用文の最後の「每一書已、向輒條其篇目、撮其指意、錄而奏之」という一文は意味を明らかにし難い。校書を委ねられた責任者として、劉向のほか任宏・尹咸・李柱國の名が擧げられているが、「條其篇目、撮其指意、錄而奏之」という叙録執筆は、劉向一人がおこなったごとくである。つまり、兵書・數術・方技といった専門的知識を要する書物の校讐にはそれぞれの責任者が當たったが、叙録の撰述は劉向が一括したと理解できる。「條其篇目」とは複數の書物の書名を目錄にまとめる意味ではなく、ひとつの書物の篇目を作成すること。<sup>⑪</sup>「錄而奏之」とは、叙録をしたためて奏上したということであろう。なおその際、「叙録」はいまだ書物としての體裁を備えておらず、校讐を終えたそれぞれの書物に附された文書であつたことが分かっている。<sup>⑫</sup>

しかし、劉向は業を終えずに他界した。劉向の目錄學上の貢獻を總括すれば、經傳すなわち六藝・諸子・詩賦の書を校讐し、また當時校讐された極めて多數の書物の叙録を書いた業績にほかならない。

漢志の序に、さらに續けて「會向卒、哀帝復使向子侍中奉車都尉歆卒業」とあるように、校書と叙録執筆の作業は子の劉歆により引き繼がれた。そしてすべての作業を遂げた劉歆は『七畧』と呼ばれる書物をまとめた。漢志序に「歆於是總群書而奏其『七畧』」というのがそれであり、のちに『漢書』藝文志の基礎となった。『七畧』は劉向以來の叙録を直接利用して編纂されたと考えられるが、『七畧』の新しさはその分類にある。劉向時代には『七畧』ほど完成された分類は存在しなかったらしい。<sup>⑬</sup> よって劉歆の目錄學上の貢獻はその圖書分類にあるといつてよい。

では、後世に名高い劉向『別錄』という書物は劉歆『七畧』と如何なる關係にあるのか。『隋書』經籍志には次のように兩書を記載する。

『七畧別錄』二十卷、劉向撰

『七畧』七卷、劉歆撰

卷數は「劉向撰」の『七畧別錄』の方が劉歆撰『七畧』七卷よりも多く、これだけと比較すると、詳しい叙録を備えた劉向『別錄』を縮小して劉歆『七畧』が成立したかに見える。<sup>20</sup>しかし、姚振宗も注意をうながす、幾つかの點に留意すべきであろう。<sup>21</sup>一、劉歆の『七畧』に先行して『別錄』がまとめられたという記録はやや後世のものである。<sup>22</sup>二、隋志に載せる書名が『別錄』ではなく『七畧別錄』である。三、劉向は志し半ばで逝去したのだから、書物としての體裁を整えた『別錄』を編んだとは思われないし、もし假に彼がそれら「叙録」をまとめていたとしても不全であつたに違いない。<sup>23</sup>四、六朝隋唐時代の諸書に引用された『別錄』から判斷すると、それには『七畧』の「輯畧」に當たる部分が含まれていた。<sup>24</sup>「輯畧」は「七畧」の一であるが、他の六畧（六藝畧、諸子畧、詩賦畧、兵書畧、數術畧、方技畧）がいちいちの書物を解説したのとは異なり、六畧の源流を述べたものであり、これは劉歆の撰である蓋然性が高い。

このような點から、『七畧』に先行して『別錄』が書物として完成されていたとは考え難く、むしろ劉歆が「叙録」を基礎としてまとめた『七畧』が早く成立し、その後その分類に沿いつつ劉向以來、皇帝に奉られた書籍に個別的に附され、蓄積されてきた「叙録」を再編集して一書としたものが、『別錄』、すなわち隋志にいう『七畧別錄』であると考えるのが妥當だと思われる。<sup>25</sup>つまり「叙録」という記録が、何れかの學者の再編集を経て『別錄』という書物として後世に傳わたのである。<sup>26</sup>

以上の通り、劉向の「叙録」はもともと皇帝に向けて上奏された文書であって、『別録』という単行本の形式をとっておらず、一般の學者は目にするのできぬものであった。それを劉歆以後の誰かが再編集して當時の學界に流通させたと考えられる。もっとも後漢においては、宮廷圖書館の關係者ならば『別録』に頼らずとも劉向「叙録」をある程度は目睹できたはずではある。

では後漢以降の學者は、その『別録』や『七畧』を参照したのか否か。まず『論衡』の著者、王充（二七—九七？）がこれを見た事は確實である。『論衡』案書篇に次のようにある。

六畧之錄、萬三千篇、雖不盡見、指趣可知、畧借不合義者、案而論之。

六畧の書物の「錄」には一萬三千篇が登録されており、たとえすべてを読み盡くせぬとしても主旨だけは分かるのであり、もしも『七畧』に理屈と合わないところがある時はその書物を調べて論じればよい。

ここには「六畧之錄」そして「畧」などの名稱が示されるのみだが、「指趣可知」とあるのによれば、王充が見たのは解題を伴った目録であるはずなので、彼が『別録』あるいは『七畧』を常に参照していたと言い得る。<sup>20</sup>

さらに『論衡』變虛篇では次のような傳承が問題とされる。宋の景公のころ、熒星が宋の分野に現れるという天文現象が起こり、太史である子韋という人物に問うたところ、公に災いが及ぶだろうと答えた。子韋はさらに、その災いを大臣、民衆、あるいはその一年に轉嫁することにより公自身の難を逃れるよう、三度にわたり助言したが、景公は三度とも拒絶した。子韋はいったん退出してからあらためて再拜し、景公の壽命が二十一年延びるであろうと豫言し、「君は三度にわたって善言を述べられたので、三つの褒美をお受けになるでしょう。熒星はかならずや三たび移動し、そのたびごとに七星が動きます。一星の移動が壽命一年に當たるので、三かける七で二十一年になります」といった。その夜、熒星はさてその通りに三舍ぶん移動した。そのような内容である。

この傳承は、現存する古書のうち『呂氏春秋』制樂篇、『淮南子』道應訓、『新序』雜事篇に見える。王充はこの話を信用せず、多方面からその虚偽を暴こうとするが、この篇の末尾で次のような論證をしている。

案「子韋書錄序奏」亦言、「子韋曰、『君出三善言、熒星宜有動』。於是候之、果徙舍」。不言三。或時星當自去、子韋以爲驗、實動離舍、世增言「三」。既空增三舍之數、又虛生二十一年之壽也。

「子韋書錄序奏」にも次のようにある、「子韋は『君は三度にわたって善言を述べられたので、熒星はかならずや移動するでしょう』といった」と。三度動くとはいっていない。たぶんその時、星が自然に動いたのを子韋が自説の根據として持ち出して、實際に星が舍を變えたことに對し、世俗では三度動いたと誇張したのである。三舍ぶん動いたと誇張したのみならず、さらに二十一年延壽の話をでっち上げたのである。

劉盼遂によれば、「子韋書錄序奏」とは『漢書』藝文志の諸子畧陰陽家類に見える『宋司星子韋』三篇という書物の、劉向または劉歆「叙錄」を指すであろう、と。<sup>29</sup>この説はおそらく正しい。つまり王充は「叙錄」の説を引用しつつ、傳承の誤りを正そうとしているのである。傳承とはたとえば『呂氏春秋』や『淮南子』に見える話のことであり、これをより原形に近い記録で訂正しようという態度である。なお「子韋書錄」の記事は『宋司星子韋』その書からの引用と思われるが、王充が『宋司星子韋』に直接依據せず、「叙錄」を利用したのは何故か。おそらく王充が『宋司星子韋』を見ていないからであろう。よって王充が『宋司星子韋』に附された「叙錄」をではなく、『別錄』所收のそれを参照した蓋然性が高いように思われる。

後漢の學者が劉向『別錄』を参照した記録として、さらに張衡（七八—一三九）の場合を挙げる。『後漢書』卷五九、張衡傳には彼の上疏を載せる。彼は後漢に流行した緯書が偽妄であるとし、天子の緯書崇拜を改めさせるべく證據を列記する中で次のようにいう。

劉向父子領校祕書、閱定九流、亦無讖錄。成・哀之後、乃始聞之。

劉向父子が祕書の校讐を仰せつけられ九流百家を校定した際にも、讖緯の書物の登録はございませんでした。成帝・哀帝時代の後になって、ようやく伝えられるようになったものでございます。

張衡は、劉向父子が緯書の校讐をおこなっていないことを理由に、前漢末までは緯書が世に現れていなかったことを證明しようとした。ただし張衡は班固以降の人物であるから、『別錄』及び『七畧』を直接踏まえたのではなく、あるいは『漢書』藝文志に依った可能性もある。だがここでは、「劉向父子」の名を出し、その校書記録に基づいて書物の眞偽をはかるとする張衡の態度を窺えば十分であろう。

さらに漢末の應劭『風俗通義』には、劉向校書についての言及があり、その佚文二條が目録學者によって確認されている。

案劉向『別錄』、「讐校。一人讀書、校其上下、得謬誤、爲校。一人持本、一人讀書、若怨家相對、爲讐」。(『文選』魏都賦注所引『風俗通義』)

劉向『別錄』には「讐校」について。一人が書を読み上げ、前後の文章を校勘し、誤謬を発見する事が「校」である。一人が本を手に取り、一人が書を読み上げ、まるで敵どうしが對峙するようにするのが「讐」である」とある。

「殺青、書可繕寫」。謹案劉向『別錄』曰「殺青」者、直治竹作簡書之耳。新竹有汗、善朽蠹。凡作簡者、皆于火上炙乾之。陳楚間謂之汗、汗者去其汗也。吳越曰殺、殺亦治也。劉向爲孝成皇帝典校書籍二十餘年、皆先竹書。爲易刊定。「可繕寫」者、以上素也。由是言之、「殺青」者竹、斯爲明矣。(『初學記』卷二八、『太平御覽』卷六〇六、『文選』張景陽雜詩注所引『風俗通義』)

「殺青、書可繕寫」ということばについて。劉向『別錄』に「殺青」とあるのは、まさに竹を加工して竹簡に仕立て、



ものを書くという意味である。新たに伐採してきた竹には油分が含まれ、朽ちたり虫害にあったりしやすい。そこで竹簡を作る場合、竹を火の上であぶって乾燥させるのである。陳や楚の地方ではそれを「汗」と呼ぶが、「汗」とはその油分を除くことである。吳や越の地方では「殺」と呼び、「殺」も加工するという意味。劉向が孝成皇帝のために書籍の校勘を擔當した際、すべてまずは竹に寫した。竹ならば校正しやすいからであった。そして「可繕寫」の「清書」できるようにしたものは、絹に記した。以上からいうならば、「殺青」とは竹についていうことばだと明らかである。<sup>30)</sup>

以上の資料から判断すると、後漢の時代にはある程度劉向父子の校書記録が學者たちに参照され、傳承を正す根據、あるいは書物の存否や眞偽を確かめる根據とされるようになっていた。劉氏の校書記録を見たのは、『七畧』をもとに『漢書』藝文志をまとめた班固のみではなかった。この跡を後漢の注釋家たちの序文からも見て取ることができ、彼らが執筆した序文の幾つかには、劉向校書についての言及がある。これによって「叙錄」から注釋書の序文へ、という直接の影響關係を論じることができぬが、注釋家たちの營爲が學術史の中で劉向以降の成果であることを明確に印象づけるものである。馬融の「周官禮序」には次のようにある。

至孝成皇帝、達才通人劉向、子歆校理祕書、始得列序、著於『錄』『畧』。然亡其『冬官』一篇、以『考工記』足之。

(據賈公彥『周禮疏』一、「周禮廢興」)

前漢成帝のころ、才能あふれる通人の劉向とその子劉歆が祕書を校讐した際、『周禮』は始めて體裁を整えられ、『別錄』『七畧』に著録された。しかし彼らは「冬官」一篇が缺けていたのを、「考工記」を用いて完備させた。

このうち、「亡其『冬官』一篇、以『考工記』足之」という記事は『漢書』藝文志には見えぬので漢志を引用したとは考えられず、おそらく劉氏の書に直接依據したものである。<sup>31)</sup>

また鄭玄「尙書大傳序」には、次のようにある。

劉向校書、得而上之、凡四十一篇。至玄始詮、次爲八十三篇。(據『玉海』卷三七)

劉向校書の際、この書を入手して奉り、すべて四十一篇とした。そしてわたくし玄が始めてそれを順序立てて八十三篇としたのである。

これは同書を四十一篇に整理した劉向と、八十三篇に整理した自分自身を並べて書いたもので、鄭玄自身の文獻整理が劉向の業績を乗り越えて爲されたことがはっきりと示されていて興味深い。

その鄭玄は『三禮目錄』を撰んだ際にも劉向を参照していたのであり、その様子は孔穎達『禮記正義』から知られる。たとえば「曲禮」「檀弓」の篇題の正義にはそれぞれ次のようにある。

案鄭『目錄』云「名曰『曲禮』者、以其篇記五禮之事。……此於『別錄』屬制度」。(『禮記』曲禮正義)

鄭玄『三禮目錄』には「これが『曲禮』と名づけられたのは、この篇には五つの禮の事が記されているからである。

……。同篇は『別錄』では「制度」に屬する」とある。

案鄭『目錄』云「名曰『檀弓』者、以其記人善於禮、故著姓名以顯之。……此於『別錄』屬通論」。(『禮記』檀弓正義)

鄭玄『三禮目錄』には「これが『檀弓』と名づけられたのは、その人が禮に通じていたのを記録したので、彼の姓名を明記して顯彰せんがためである。……。同篇は『別錄』では「通論」に屬する」とある。

こうして『禮記』の篇題の正義を見てゆくと、『別錄』においては『禮記』諸篇が「制度」「通論」「喪服」「祭祀」「世子法」「子法」「吉禮」「吉事」などに分類されていた事が分かる。鄭玄はそれらを仔細に記録した。<sup>32)</sup>

さらに漢末の高誘は「呂氏春秋序」において、『呂氏春秋』という書物が「孟軻・孫卿・淮南・揚雄と表裏をなすものであるからこそ、『別錄』『七畧』に著録された(與孟軻・孫卿・淮南・揚雄相表裏也、是以著在『錄』『畧』)」といい、「淮南鴻烈序」

では「光祿大夫劉向がこの書を校定してしたため整えて、『淮南』と名づけた（光祿大夫劉向校定撰具、名之『淮南』）」（前掲）と  
いい、兩方の序文中に劉向父子の著録、校書への言及が見えるのである。

三國時代に入っても引き續き、積極的に『別錄』や『七畧』が参照された。魏の何晏による「論語序」が、その冒頭で  
長文にわたり劉向説を引用していることは殊に名高い。また三國魏の黃初以降の人とされる仲統氏が書いた「尹文子序」  
には、次のようにある。

劉向亦以其學本于黃老、大較刑名家也。近爲誣矣。（道藏本）

劉向はこの書が黃老に基づいてはいるが、主旨としては刑名家であるといった。これは誤りであろう。

劉向がこの書を「その學は黃老に本づくも、大較は刑名家なり」と「叙錄」中に判斷したのに對し、それを「近爲誣矣」  
と反駁しており、劉向叙錄の内容に踏み込んで批判したものとして興味深い。また三國吳に書かれた序文が「叙錄」を參  
照する例として、前述の韋昭「國語序」に「及劉光祿於漢成世、始更考校、是正疑謬」とあるのが指摘できるのである。

以上のように、後漢から魏晉にかけての注釋家たちは、劉氏父子の校書記録を頻繁に参照した。彼らは「叙錄」に依っ  
たのか、あるいは『別錄』『七畧』といった單行本に依ったのか。これは重要な問題である。というのは、もしも「叙錄」  
に依ったとすると、「叙錄」ばかりではなく劉氏らの校定本文をも見た可能性が生じるからである。劉向「叙錄」と『別錄』  
は、しばしば『四庫全書』所收本に冠された「書前提要」と『四庫全書總目提要』の關係に比せられる。<sup>34</sup>つまり「叙錄」  
や「書前提要」には必然的に校定本文を伴うが、一方の『別錄』や『庫目提要』には本文がない。そしていま、後漢魏晉  
の學者たちが劉氏の校書記録を利用したさまを上記の資料からかいま見ると、劉氏の校定本文を後漢以降の學者が實見し  
たと確言できる例は少數であるように思われる。鄭玄「尚書大傳序」に「劉向校書、得而上之、凡四十一篇。至玄始詮、  
次爲八十三篇」（前掲）とあるのは、劉向の校定本文に依據して鄭玄が再編したものとも考えられるが、その確實な證據と

まではみなせまい。

思うに、劉向の整理を経た書籍はすべて皇室の所有となった。しかも前漢末から後漢にかけての時期、その轉寫本が臣下に對して頻繁に下賜されたり貸與されたりする事はなく、また學者が宮廷の圖書館に自由に赴いて閱覽することもなかった。このように考えると、「叙錄」を附した劉向校定の書籍が民間に廣く流通し、ひいては當時學界に流通していたその他の傳本を驅逐し面目を一新するほどの影響を及ぼしたわけではあるまい。これに對して『別錄』『七畧』は單行本であるがゆえに、流通も盛んとなり参照も容易となつていったと考えられる。

この點を『淮南外篇』という書物について検討してみたい。この書は淮南王劉安を中心として編集され、『淮南子』の外篇的性質のものであったというが、今日には傳わらない。高誘が「淮南鴻烈序」の中で劉向校書について「光祿大夫劉向校定撰具、名之『淮南』」と言及した事は、既に述べた。そして高誘の『淮南子』注解は、『別錄』に著録された二十一篇本と同じ篇數の本に基づいてなされた。しかるに高誘序はこれに續けて次のようにいう。

又有十九篇者、謂之『淮南外篇』。

この他さらに十九篇あり、これが『淮南外篇』と呼ばれる。

『漢書』藝文志に同書の著録を探すと、『淮南外』とあるのが見<sup>(35)</sup>あたるが、その篇數は「三十三篇」となっているのである。漢志は劉歆『七畧』に直接基づいたとされるので、『七畧』に著録された『淮南外』は三十三篇であつたはずである。『淮南外』の校定が劉向によってなされたのか、劉歆によってなされたのかは明らかでないが、何れにせよ劉氏の校定を経てこの書は三十三篇に定められたと考え得る。しかし高誘が同書を十九篇と明言している以上、高誘所見の『淮南外篇』は劉向校定本とは異なる源流を持つ傳本であつたことになる。つまり劉氏が『淮南外』を三十三篇と定めた後も、その他の系統の寫本が一掃されたとは考え<sup>(36)</sup>難い。なお高誘は『淮南外』三十三篇本の校書記録を『別錄』及び『七畧』に依つて參

照し得た可能性があるが、その場合でも己が實見した十九篇本を優先的に序文中に記録したものととも考えられる。

さらに高誘が基づいた『淮南子』についても、上述のように篇數こそ一致はするが、それにより高誘が劉氏校定本に依據したとは斷定できない<sup>27)</sup>。劉氏校書についての事實に言及したといえるのみである。

このように見ると、後漢以降の學者に與えられた劉氏校書の影響は、「叙錄」を附した校定本文を通じてというよりは、『別錄』『七畧』を媒介としたものであったと推測される。後漢魏晉の注釋家たちが撰んだ序文から窺える劉氏校書の影響も、『別錄』『七畧』の記事をもとしたものが多數を占めるのではなからうか。それらを通じて劉氏校書に對する注釋家たちの知識が豊富になっていったものと考えられる。

目錄學史では『漢書』藝文志以降の書目の歴史に對する劉向の決定的な影響が強調されるが、目錄家ではない一般の學者たち、ことに注釋家たちにも、劉向父子校書の歴史的意義とその内容についての理解が十分に共有されていた點も指摘されるべきであらう。

#### 第四章 後漢以降現れた新形式の注釋書

次に挙げる「表二」は、前掲「表一」に挙げた諸注釋を序文成立の時代順に並べ直したものである。これによると、經書の注釋書の序文のうち成立がもっとも古いものは、現在知られるところ、後漢の半ばごろに活躍した馬融のものである。もちろん現在傳わっていないからといって、直ちにそれ以前の注釋家が經學史上序文を書かなかったと論斷はできぬが、經學においては馬融前後からこのような習慣が始まったと當面考えておく。

前漢時代には經書の注釋家たちが序文を書く習慣を持たなかったと思われるのに、馬融あたりを一應の境に、多くの注

釋家が序を書くに至ったのはなぜか。その理由の一つに學問のあり方の變質が想定される。

前漢時代的な經學の傳授の場においては、書物が師から弟子へと伝えられるのが一般的であつたらしい。そのような傳授の形態では、ある書物の價值を學派の部外者に向けて伝える、序文のような文體が生まれてくる必要がなかったと考えられる。書物は學派内部では基本的には無條件に受け入れられ、書物を傳授し續けていくのが當然だという前提が師弟に共有されていたからである。

〔表二〕 各時代に撰述された序文（〔表一〕に見える序文を時代別に再編）

- 〔後漢〕 班固 (32-92) 『離騷經』・王逸 (順帝時) 『楚辭』・馬融 (79-166) 『尚書』『周官禮』・胡廣 (91-172) 『漢官解詁』『百官箴』・戴宏 (後漢) 『解疑論』・鄭玄 (127-200) 『尚書大傳』『周官禮』『孝經』・何休 (129-182) 『春秋公羊解詁』・趙岐 (?-201) 『孟子』・顏容 (初平中) 『春秋釋例』・高誘 (建安一七年以降) 『呂氏春秋』『淮南子』・任氏 (後漢末) 『徐氏中論』
- 〔三國〕 魏武帝 (155-220) 『孫子兵法』・虞翻 (170-239) 『周易』・陸績 (187-219) 『揚子太玄經』・何晏 (190-249) 『集解論語』・王肅 (195-256) 『孔子家語』・韋昭 (204-273) 『春秋外傳國語』・仲統氏 (三國) 『尹文子』・趙嬰 (三國) 『周髀』・劉徽 (三國魏) 『九章算術』・佚名 (吳以降) 『玉璽針經』
- 〔西晉〕 杜預 (222-284) 『春秋左氏傳經傳集解』・陳劭 (泰始中) 『周官禮異同評』・范望 (西晉初期) 『揚子太玄經』・郭象 (?-312) 『莊子』・劉逵 (西晉) 『蜀都吳都賦』・衛權 (西晉) 『三都賦』／孔安國 (『古文尚書』『古文孝經』)?
- 〔東晉〕 郭璞 (276-324) 『爾雅』『方言』『山海經』・范寧 (339-401) 『春秋穀梁傳』・張湛 (孝武時) 『列子』・張璠 (東晉) 『周易』

ところが、後漢では今文古文の論争に象徵されるように、學問をめぐる活潑な議論が発生し、國家が定めた博士以外の學派やそれまで重視されなかったような先秦古籍に對する關心が全體として高まってきた。<sup>38</sup>これは一方で、かつて吉川忠夫「鄭玄の學塾」(川勝義雄・礪波護編『中國貴族制社會の研究』京都大學人文科學研究所、一九八七年)がいっきと描寫した、鄭玄の學塾を典型とするような、博士以外の民間の學者による教育の大規模な發展をうながしたが、また一方で、直接の授業聽講に據らず、注釋書という書物によって學問を理解する讀者層の擴大をも導いたと考えられる。つまり、學問が學派內部で閉じることが社會的に難しくなり、學派外の學者に對しては、自分の傳えた書物と注釋の意義を明示する必要が生じたのではないか。

後漢の學者の學問意識を窺う例として王充の場合を考えたい。『論衡』書解篇において、學者は「世儒」と「文儒」とに二分される。<sup>39</sup>「世儒」とは師資相承、主に口傳で學問を代々傳えてゆく儒者のことで、「文儒」とは弟子をとらず著述をなしておのれの學問を傳える儒者のことをいう。ある論客が王充に對して「世儒」の優越を次のように語った。

文儒不若世儒。世儒說聖人之經、解賢者之傳、義理廣博、無不實見、故在官常位、位最尊者爲博士、門徒聚衆、招會千里、身雖死亡、學傳於後。文儒爲華淫之說、於世無補、故無常官、弟子門徒、不見一人、身死之後、莫有紹傳。

文儒は世儒にはかなわない。世儒は聖人の經典を説き、賢者の注釋を理解し、義理に博通しすべてを行動として實現する。それゆえ官には常に位が用意され、官位が最高のものは博士となり、弟子を多く集め、千里の彼方から呼び寄せる。たとえ本人が死去しても學問は後世へと傳わるのだ。一方、文儒は輕薄で大げさな説を唱え、何ら社會の役に立たないので、官位は常には得られず、弟子など一人もおらず、死んでしまつたらそれを傳える者は誰もいない。

これに對して王充は次のように反論して「文儒」の勝利を確信するのである。

世儒業易爲、故世人學之多。非事可析策<sup>④</sup>、故官廷設其位。文儒之業、卓絕不循、人寡其書、業雖不講、門雖無人、書文奇偉、世人亦傳。彼虛說、此實篇、折疊二者、孰者爲賢？

世儒の學問は學習が容易だから、世間の人が多く學ぶのだ。官職は任意に分け與える事のできぬものだから、朝廷では官位を設けてくれるのだ。文儒の學問は卓絶しており世の習いに従わず、人々はその書を珍しく思うので、學問を講じなくとも、また門人がおらずとも、書物の文章が見事なのだから、世間の人はやはり傳えるのである。世儒の虚しい口頭傳授と、文儒の實物を備えた書物と、兩者を並べてみればどちらがまさっているかはいわずとも明らかである。ここでは「虚説」と對比された「實篇」、すなわち本の物質性への信頼が語られている<sup>④</sup>。王充が顯彰しようとする「文儒」は、直接に注釋學者を指すのではなく、むしろ天才的な素質を持つ著作家であろう。だが門人や官職を頼らず、書物によって自己を表現する學者としての方途が、ここに自覺されている。この明確な自覺は才人王充にしてはじめて得られたものかも知れぬが、より一般的に學術界の流れを反映したものとも考えられる。つまり前漢時代よりも遙かに増大したと想像される書物の流通と讀者層の擴大がなければ、王充のいう「文儒」としての學問は成立し得ないのである。

後漢時代における注釋についても同様の環境を考える必要がある。つまり、後漢期に入り、口頭傳授による經書講義がそれまで以上に活性化するとともに、一方、書物たる注釋書により自己の思想を表現しようとした古典注解が誕生したところである。現在傳わっている後漢魏晉の注釋書の序文を見ると、それらは自分の學生たちに向けて書かれたものというよりは、むしろ師承關係を前提としない學派外の人々へのメッセージである事が分かる。特に經學以外の書物の注釋においては、師承關係などとも期待できないのであるから、この傾向が強い。

〔表一〕の中ではそれがGの要素に當たるが、たとえば趙岐「孟子題辭」の場合、次のようにいう。

愚亦未能審於是非、後之明者、見其違闕、儻改而正諸、不亦宜乎！



わたくしも注釋の當否の判斷は確實にはできないので、のちの賢者が私の誤りや不足に氣づいてもしも補正してくだ  
さるとしたら、立派なことだとおもうのである。

これは明らかに、師弟關係を前提としておらず、書物が書物それ自體、學者たちの間に流通して傳わっていくことが趙岐  
の心づもりとなっているものだ、見て取れるのである。

また陸績「揚子太玄序」には次のようにある。

凡人賤近而貴遠。聞績所云、其笑必矣。冀値識者、有以察焉。

いったい人は身近な事物を侮り、遠く離れた事物をあがめるものだ。私が揚子を稱揚するのを聞けば、笑い飛ばすこ  
と必定であろう。ものの分かった人物にその事をお察しいただきたいと思う次第である。

かなり高壓的な調子ではあるが、まだ見ぬ知己に向けられたメッセージである。知友や學生に對してこうは發言できまい。  
もちろん、このように注釋家が讀者に向けて語りかけるのは、四部分類の子部の注釋書に限った事ではなく、經部に屬  
する書であっても學界での認知が十分でない書物の場合は同様であった。王肅「孔子家語序」には次のようにある。

斯皆聖人實事之論、而恐其將絕。故特爲解以貽好事之君子。

この書に記されているのはすべて聖人が實際に行動した記録なのだが、そのうちに滅びてしまうのではないかと心配  
している。そこで私は特に解釋を施して好學の君子たちにお届けするのである。

この文章の「貽好事之君子」という表現からは、王肅が單に口頭の傳授によって學問を伝えるのみではなく、物質性を帶  
びたものとして『孔子家語』を見ているのではないかと感じられる。「好事之君子」に傳える事によりこの書の生命を永遠  
のものにしようというのが如きである。このように、後漢魏晉の注釋家たちはしばしば讀者に向けた傳言を序文中に織り込  
んだ。

遡って劉向校書の時代を考えると、書物が學派外の人々に積極的に紹介されるのは一般的ではなかった。しかし、劉向は成帝の命を受けて大量の書籍を整理し、それを皇帝、つまり特定の學派の内部の學者ではない人物が理解できるように上奏しなければならなかった。「叙録」の文體は、學派を前提としてはおらず、書物を突き放してとらえたものであるといえよう。劉向は對象とする書物との間に一定の距離をとりつつ論じ、それを紹介したわけである。

「叙録」と後漢以降の序文とは、記述内容の類似にとどまらず、書物の部外者に書物を紹介しようとする態度も共通するといえる。態度の類似が、兩者の内容的な類似をあらしめているのであろう。劉向「叙録」は皇帝に奏上されたのに對し、後漢以來の序文は主に不特定の一般讀者に向けて書かれたが、結局兩者とも學派や師承關係を前提とせず、その書物を書物の外部にいる人間に向けて解説した文であるという點は同じである。

さて先に私は、大まかにいって馬融のころから經書の注釋には形態上の二つの變化が起こりだし、その一つは注釋家の序文が冠されるようになった事であり、いま一つはそれまで別行するのが普通であった注と經とが一つの本に合わせて書かれるようになった事だと指摘した。ここで後者、つまり經と注との合併の問題に觸れておきたい。

そもそも前漢時代には一つの本に合わせて書かれることがなかった經と注が合併されるようになる初期の例を、馬融に求めたのは唐初の孔穎達『毛詩正義』であり、それには次のようにある。

毛爲詁訓、亦與經別也。及馬融爲『周禮』之註、乃云「欲省學者兩讀、故具載本文」。然則後漢以來、始就經爲註。『毛詩』周南召南故訓傳第一、「鄭氏箋」正義

毛氏が「詁訓傳」を著した際にも、傳は經と別であった。馬融が『周禮』に注したときには、「學習者が經と傳を別々に讀む手間を省くため、經文もすべて載せる」といった。ということは後漢以降になって始めて經に附帶して注がな

されるようになったのである。

ここには馬融の説が見えるのだが、この一文が何に基づくのか不明である。が、おそらくは馬融「周禮序」からの引文と推測できる。「欲省學者兩讀、故具載本文」という文句は馬融自身の手になる序文中に記してあったであろう。その他の馬融の文章にこの文句が含まれていたとは想像し難い。

ところで前漢時代に經と注が別行していたという説は孔穎達以前にもあり、隋の劉炫『孝經述議』には次のようにある。

前漢以前爲傳訓、皆與本文別行。孔欲省其兩讀、故悉載本文於上、作傳接於下。〔孝經述議〕卷一、孔安國序「悉載本文、

萬有餘言」〔述議〕

前漢以前に訓釋が施される場合、決まって注釋は經文とは別行していた。孔安國は經と傳を別々に讀む手間を省くため、經文をすべて上に書いて、その下に續けて傳文を書いたのだ。

劉炫が「孔欲省其兩讀、故悉載本文於上」というのはむろん孔安國序の「悉載本文」に基づくのだが、「省其兩讀」という表現は、上記『毛詩正義』に馬融を引いて「欲省學者兩讀」とあるのと偶然の一致であろうか。劉炫が經注を合併させた後漢の注釋家として、馬融を意識し、その「序」の言葉を用いた可能性が強いのではないか。また馬融前後の時代を考えたて、その形式が一般的といえるほど普及していなかったからこそ經注の合併について一言あるのであろうし、このころから合併が始められたと考えてよいのではなからうか。<sup>④</sup>

その他、經注の合併という形態を當初からとっていたはずの注釋書を檢してみよう。<sup>⑤</sup>序文にその旨が記されているものとして、馬融以外に次の例がある。

王逸「楚辭序」には次のようにある。

今臣復以所識所知、稽之舊章、合之經傳、作十六卷「章句」。

ここでいまわたくしは自分の知るところを先行の解説に照らし、經と傳とを合わせて十六卷の『章句』をつくった。  
趙岐「孟子題辭」には次のようにある。

是乃述己所聞、證以經傳、爲之章句、具載本文、章別其旨、分爲上下、凡十四卷。

そこで自身の傳聞を述べ、經傳によってたしかめ、章句をつくって、『孟子』の本文をすべて載せ、文章の内容を章によって分割し、一篇ごと上下に分け、計十四卷とした。

高誘「淮南鴻烈序」には次のようにある。

建安十年、……、覩時人少爲『淮南』者、懼遂凌遲、於是以朝誦事畢之間、乃深思先師之訓、參以經傳道家之言、比方其事、爲之注解、悉載本文、并舉音讀。

建安十年、……、人々のうち『淮南子』を學ぶ者が少ないので、そのままみされてしまうのではと危惧し、日常のひまを見つけては先師の解釋を深く考え、經傳や道家の書を参考に、事實關係を比較し、注解をつけ、本文をもすべて載せ、また字の讀みを附したのだ。

このような例からも、注釋を施す際に經注を合併する習慣が、漢代のうちにかなり普及したとみてよい。<sup>4)</sup> 前漢の孔安國に假託された「古文孝經序」には次のようにある。

吾愍其如此、發憤精思、爲之訓傳。悉載本文、萬有餘言。朱以發經、墨以起傳。

私はこのような狀況に心を痛め、發憤して思いをこらし注釋を書いた。經文をすべて載せ、一萬字あまりとなった。經文は赤で記し、傳は墨書した。

この「古文孝經序」そして孔安國傳が前漢に書かれたものでないことは言うをまつまい。劉炫は「前漢以前爲傳訓、皆與本文別行」であることを明確に知りつつ、なおこの『古文孝經』並びにその序文を前漢の作と考えたが、我々がこのよう

に強辨する必要はない。そして「悉載本文」という文句は後漢の注釋家たちの言葉と一致し、如實に後漢以降に生じた學術史的な變化を反映しているのである。さらにいうならば、この序は後漢に書かれたものですらないであろう。序に示される、經傳を朱墨の二色で書き分けるという方法、「朱以發經、墨以起傳」という行爲は、三國魏の董遇の創意にかかると思われるからである。<sup>(45)</sup>

初、遇善治『老子』、爲『老子』作訓注。又善『左氏傳』、更爲作朱墨別異。(據『三國志』魏書、王肅傳引魚豢『魏畧』)。

さて董遇は『老子』に通じており、『老子』の注を著した。また『左氏傳』にも通じ、朱墨で分かつて記したのである。董遇の「爲作朱墨別異」の内容は必ずしも明らかでないが、『左氏傳』と自己の注を朱と墨で分かち書きにしたと考えておく。孔序はすでにそれが序文であるという點において前漢的ではなく、經注合併という讀者への後漢的な配慮がなされている點でも前漢的ではなく、さらに朱墨二色を用いるという高度な工夫がなされているという點で、漢代的ですらない。この「古文孝經序」は、後漢以降の新しい注釋書の典型というる。

後漢以降の注釋書にあたらに現れた二つの習慣、すなわち序文を附し、經注を合併するという習慣は、明らかに同一の根源から生じた二つの發露に違いない。つまり注釋家が讀者を明確に意識した、その現れである。序文は、讀者に向かつて古典の要旨を簡潔に伝える表現を確立した。そして經注の合併は、それ以前には避けることができなかった古典讀者の大きな手間を省いたのである。

## 第五章 『楚辭』の序文をめぐって

以上、後漢以降の注釋家が劉向「叙錄」から影響を受けた可能性について検討してきたが、その際に取り上げた注釋書

は四部分類の集部以外の書物、『漢書』藝文志の詩賦畧以外の書物の注釋にあたる。詩賦畧、あるいは集部に屬する書物に對する注釋は、この時期決して多いとはいえぬが、『楚辭』をめぐる注釋の歴史はいささか特別な展開を見せている。

第一に、本稿ではこれまで強調した通り、經學においては馬融の序文執筆が、その初期の例として指摘できるが、〔表二〕をあらためて見ると、經學に限らずというなら、實は時代的には班固（三一九二）「離騷序」の方が成立が早い。

第二に、王逸は馬融とほぼ同時期に生きた注釋家であるが、彼が『楚辭』に與えた序文は、馬融の序文と異なり殘缺なく傳えられていると考えられる上、内容的に見ても、本稿で検討したような漢魏兩晉注釋家の序文の特徴をすでに複数の點において備えている。

まず班固「離騷序」について述べると、同序は現在では王逸章句本『楚辭』に見える。班固の序に「故博采經書傳記本文、以爲之解」という一文があるので、これが注釋の序文であることは疑いない。但し、この注釋は『楚辭』一書に加えられたのではなく、『離騷』という書物として小規模なものに對してなされたものであることには注意が必要である。その班固序に次のような興味深い記事がある。

昔在孝武、博覽古文、淮南王安叙『離騷傳』、以「國風好色而不淫、小雅怨悱而不亂、若『離騷』者、可謂兼之。蟬蛻濁穢之中、浮游塵埃之外、嶠然泥而不滓。推此志、與日月爭光也」。斯論似過其眞。又說「五子以失家巷、謂五子胥也」、及至羿・澆・少康・貳姚・有娥佚女、皆各以所識、有所增損、然猶未得其正也。

かつて前漢孝武帝が古文を博く讀まれた頃、淮南王劉安は『離騷傳』を叙し、次のようにいった、『詩』の國風は好色でありながらゆき過ぎず、小雅は感情をこめつつも取り亂していない。『離騷』についていえば兩者の美點を備えたものといえよう。彼は汚濁の中から抜け出し、汚れた世間の外に遊び、潔白で薄汚れようもなかった。彼の志を考え

れば日月と明るさを競うほどである」と。これは實際以上の過大評價であろう。また「五子もって家巷を失う、とは伍子胥のことを指す」といい、羿・澆・少康・貳姚・有娥佚女についてもそれぞれ記述があり、詞章を工夫しているが、なおやはり「離騷」の眞實をとらえたものではない。

問題としたのは班固が「淮南王安叙『離騷傳』」と呼ぶものの正體である。班固はそれを實見しつつ「離騷叙」を書いているらしい、それが何であるかについては諸説ある。

一、王念孫は、「離騷傳」とは「離騷傳」の譌であり、すなわち高誘「淮南鴻烈叙」などにいう「離騷賦」のことを指す、つまり注釋ではなく劉安自身の賦であるという。<sup>46</sup>

一、章太炎は、『史記』屈原傳は劉安「離騷傳」を襲ったものであるといい、「離騷傳」は「離騷」に纏わる傳記を記した書物だと考えている。<sup>47</sup>

一、余嘉錫は「離騷傳」の「傳」は『詩』の「毛傳」などと同じで注釋書の意味であるという。さらに「叙『離騷傳』」の「叙」とは序文の意味に他ならないという。<sup>48</sup>

一、楊樹達は、前漢時代においては訓詁的注釋を指した「故」と異なり、「傳」は汎論的な注釋であつたとし、「離騷傳」も前漢的「傳」の一種だといふ。<sup>49</sup>

このうち王說についてはここで取り上げないが、その他の説のうち何れが妥當なのか。班固の序文に引く『離騷傳』には「若『離騷』者、可謂兼之」という、「離騷」の文章についての言及がある。このことは、『離騷傳』が純然たる傳記著作ではないことを示すように思われる。ましてや「五子以失家巷、謂五子胥也」と「離騷」の句を引いて解釋しているのだから、これはほとんど注釋の表現に間違いない。従つて『史記』がその文章を列傳の中に組み込んでいる可能性があるにせよ、直ちにそれを傳記と斷定することはできず、結果として章氏の説にはくみできない。『離騷傳』を『離騷』の

ある種の注釋書と見る方がより適切である。

一方、余嘉錫が「叙『離騷傳』」を「『離騷傳』に序を書いて」と理解するのは正しいのか。書く、という意味で「叙」を理解できるこの部分を、敢えて序文という意味にとることに對して、余氏の説明はない。確かに「若『離騷』者、可謂兼之」という書物そのものに對する言及は、注釋そのものというよりも注釋書の序文の文章に似ており、後漢以降の注釋家が書いた序文の中にも類似のものを見いだすのは容易である。しかし前漢以前の注釋形式といわれる「傳」のうち、『易』の「繫辭傳」はその代表的なものであろうが、この注釋の中には明らかに『易』そのものに對する評價の言葉が見える<sup>⑤</sup>。それゆえ内容からいっても「叙『離騷傳』」を必ずしも序文と考へなくともよい。

また假に劉安が序文を書いたとしても、班固がそれを「叙『離騷傳』」と表現するであろうか。序文であるならば、「叙『離騷』」あるいは「叙『離騷經』」と呼ぶはずであると考ええる。というのは、後漢魏晉の注釋家の序文の題名について見ると、たとえば杜預の『春秋』につけた序文が「春秋左氏傳集解序」ではなく「春秋序」であることから知れるように、これらの序文は解釋の對象となる書物を述べたものである。おそらく後漢魏晉の注釋家がある書物に注をつけ、某書「注」序と名づけた序文を書いたという例は發見できぬであろう。それゆえ、ここでは「叙『離騷傳』」をひとまず「『離騷傳』を書いて」と理解しておきたい。以上の検討から、楊樹達説がもっとも實情に近いと判斷される。

しかし、たとえ淮南王劉安の文章が序文ではないとしても、この書は注釋書の序文という文體の成立に大きな影響を與えたと思われる。この『離騷傳』は『漢書』藝文志には著録されておらず、その理由は明らかではないが、少なくとも班固が『傳』を參照したことは確かであろう。班固はそれを批判しつつ「離騷序」を執筆したのである。現存の資料から見る限り、當時注釋書に序文を書く行爲は一般的ではなかったと想像されるが、班固が序文の執筆を思い立つのに、劉安の注釋がかなり重要な觸媒となったのではあるまいか。



この班固「離騷序」は文章が完結しており殘闕はないものと見られる。しかし「表二」からも知られるように、後の序文が一般的に備えている要素の多くをこの序は缺いており、かなり規格的な印象を受ける他の序文とまったく同質だとは言いい切れない。これは序文執筆が注釋家の習慣として定着する以前の様相を、班固序が示しているからであろう。つまり、この序がのちの注釋家たちの序文の發生を直接的に導き、その文體が規範とされたとは想像し難いのである。

次に、班固の後に「楚辭序」を書いた王逸について考えたい。「表二」では、馬融よりも先に王逸を配してあるが、王逸の生卒年が不明なので決定的なことはいえない。『後漢書』卷六〇上、文苑傳上、王逸傳によれば、彼は元初中（一二四—一二〇）に上計吏となったのち校書郎に轉じ、順帝（在位一二五—一四四）の時に侍中となった。馬融の生卒年は西曆七九年から一六八年なので、ほぼ同時代人と考えておいてよい。<sup>②</sup>

さてその序文の中で、班固同様、王逸は劉安の『離騷經』注釋を踏まえている。

至於孝武帝、恢廓道訓、使淮南王安作『離騷經章句』、則大義粲然。

前漢孝武帝のころ、聖人の教えをおし廣めて、淮南王劉安に『離騷經章句』を作らせたところ、「離騷」の大義がおおいに明められたのである。

また序文の中で王逸は、屈原が直實であり忠義であったことを稱えた上で、次のようにいう。

而班固謂之「露才揚己」「競於羣小之中、怨恨懷王、譏刺椒蘭、苟欲求進、強非其人、不見容納、忿恚自沈、是虧其高明而損其清潔者也。……論者以爲露才揚己、怨刺其上、強非其人、殆失厥中矣。

それなのに班固は「屈原は才能をひけらかして自分を持ち上げ」「小人どもの間で力を競い、懷王をうらんで大夫の子椒と司馬子蘭らを誹謗し、みだりに權力を求め、彼らを強硬に非難し、憤って身を投げてしまった」と評價するが、

これは屈原の氣高さと高潔さを傷つけるものである。……。論者が屈原は才能をひけらかして自分を持ち上げ、王をうらむ者だと考え、強引に非難するのは、おそらく當を得た評價ではあるまい。

王逸が引く班固の言葉は、「離騷序」の中に「露才揚己、競乎危國羣小之間、以離讒賊、然責數懷王、怨惡椒蘭、愁神苦思、非其人、忿懟不容、沈江而死」というのに相當する。劉安は屈原を高く評價した。その劉安の評價を班固はその序文の中で批判し、さらに王逸は班固の説を拒絶してむしろ劉安に同意するのである。つまり劉安から班固、王逸へと注釋が受け継がれる様子が、王逸の「楚辭序」に刻み込まれているといえる。

そしてこの王逸序を、他の後漢魏晉の注釋家たちが書いた序文群の中でとらえると、他の序文ときわめて類似していることが、「表一」を通して端的に理解できる。等しく『楚辭』の注釋書で、しかも同様に序文を附しながら、班固序と王逸序とは懸隔が存在するのである。

前章で私は、經學において馬融を一應の境として、序文を附した新形式の注釋が登場してきたことを述べた。しかし本章で説いた班固「離騷序」は時代的にいって馬融に先行し、さらに王逸もほぼ馬融と同時代人である。これは何を意味するのか。漢代に成立した大部分の注釋書が減んで傳わらぬという、あまりにも大きな資料上の制約が横たわっているため確實な論述はできないが、經學に先んじて『楚辭』に序文がつけられたという可能性を考慮に入れる必要がある。

後漢の馬融以降の經書注釋家が、劉向「叙錄」の影響を蒙って序文を執筆するようになったというのが本稿の推論であるが、しかし劉向（前七七？―前六）と馬融（七九―一六六）は生年を一五〇年も隔てているのに、馬融の登場まで、この分野の進展がまったくなかったと考えるのは實情に反するであろう。漢代の書物注解の歴史において、常にその主な対象は六藝の書、經書であったが、それ以外の分野に注釋史の展開を促す伏流が潜んでいた可能性はある。

そのひとつとして『楚辭』の注釋史が考えられる。おそらく劉安の『離騷』注釋が班固「離騷序」の呼び水となり、さ

らにそれらを基礎に王逸が『楚辭』一書の注釋たる『楚辭章句』と「楚辭序」を完成させた。劉安や班固の存在が、王逸「序」出現を促したのかも知れない。<sup>55</sup> 詩賦である『楚辭』が、經書などとはまったく異なったあり方で受容され、その過程で序文の必要が生じた可能性がある。詩賦は文體としては説明的なものではないので、何らかの補足的説明が必要な場合が多いと思われる、その一手段として賦序という文體が利用された。<sup>56</sup> ただしそれは一篇の詩賦の序であって、一書の序ではない。<sup>55</sup> が、その一篇の賦序が「離騷」の序―すなわち班固「離騷序」―へと進展し、さらに『楚辭』という書物の序―王逸「楚辭序」―を生み出すに至ったのではないか。『楚辭』の受容と注釋の歴史が、注釋書の序文という新しい文體が成立する、重大な學術史的轉換にとってひとつの契機となった可能性を指摘しておきたい。<sup>56</sup>

## 結

前章で述べたような『楚辭』をめぐる特殊な事情があったにせよ、無論、王逸「楚辭序」といえどもまったく純粹に『楚辭』の傳承、注釋史の中から發生したのではあるまい。むしろ『楚辭』注釋史の影響を受けつつも、馬融らとも揆を一にした、より大きな同時代の學術史的轉換から王逸「楚辭序」は生まれたのであろう。<sup>57</sup> 馬融の注釋の形態上の特徴として、序文を附するほか、經注を合併させたことが挙げられるが、王逸においてもそれらがおこなわれたとは既に述べた。これを偶然とは考えがたい。さらに、王逸の序にも「逮至劉向典校經書、分爲十六卷」といって劉向校書に言及するのだから、ここにも劉向の影響が指摘できるのである。<sup>58</sup>

後漢以降に注釋書に序文が書かれるようになるという現象は、學問が前漢的な學派から離れ、書物がそれ自體流通するようになる當時の學術史的な動向の中から生まれてきたものと考えられる。經書の經文と注が結びついて一つの書物をな

すという形式も前漢以來のものではなく、注釋書の序文の發生と時を同じくして後漢の半ばころから始まったらしい。これは讀者が簡便に經と注とを参照できるようにとの配慮であつた。その後、漢末から三國以降には、經文と注文とを備えて序文を附した新しい形式の注釋書が主流になってくる事が窺われる。

序文とは、書物の價值と内容を部外者に向けて傳達するための手段である。注釋書に限って言えば、序文の執筆とは古典を社會に向けて發信する行爲に他ならない。私は前漢的な學派の崩壞のひとつの現れを注釋家が序文を書き、書物の形態を變化させたことに見て取つた。しかしそのような現象が確かに注釋の歴史から産み出されたものであるにせよ、それにも前史があるのではないか。注釋家の序文について、清の趙翼が次のようにいうのは示唆的である。「何休の『公羊傳』の序、杜預の『左氏傳』の序は、經書を傳えた學者がみずからものした序文である。司馬遷、班固の「序傳」は、歴史家が手ずからものした序である。そして劉向が諸書につけた「叙録」は、古籍整理者がみずからものした序なのである」<sup>29</sup>。ここには歴史的な意識がほとんどはたらいでないようだが、注釋家の序、歴史家の序、古籍整理者の序の三者を對等に列したのである。劉向の「叙録」とのちの注釋家の序文が内容的に近く、學術史において似たように機能したという點からすると、的を射た指摘であるといえる。

後漢魏晉の注釋家が序文を書き出すや、後の注釋家にとって、序文を書くことは當然に屬するわざとなつてしまつた。おそらく唐宋以降の注釋家で序文を書かなかつた者はほとんどあるまい。しかしだからといって漢代においてもそれが學者の常識であつたということではできない。その文體の規範となつたであろう複数の可能性のうち、特に劉向父子の校書記録が特に重要だつたのではないかという推論を本稿において提案したのである。

註

(1) 例外として唐代に成立した『孝經』唐玄宗注がある。

(2) 古代の書物に附せられた序文という文體の分類について、より厳密に考えるならば、大きくはⅠ「自著に對する序」とⅡ「他人の記した書物や文章群を整理した際に加えた序」の二者に分かつべきであろう。その上でⅡについては、古典の注釋の際に撰ばれた序文、注釋を伴わない古籍整理の序文、同時代人の著書を編集した際の序文、複数の書物を再編集した際の序文など、序文作者と書物との關わり方の違いによって下位分類を設ければよい。

(3) 東晉時代に成立した注釋書としては、『春秋穀梁傳』范寧注、『列子』張湛注、『山海經』郭璞注などがある。これらは漢魏西晉の古注の殿軍をつとめたものと考えられるので、東晉末までを注釋史上の一應の區切りとみなす。

(4) 前漢初期においては六經でさえ、いまだ書物として一定不變の形を獲得するに至っていない。何休「春秋公羊傳序」には後漢の戴宏「序」を引いて次のようにいう。

子夏傳公羊高、高傳與其子平、平傳與其子地、地傳與其子敢、敢傳與其子壽。至漢景帝時、壽乃其弟子齊人胡毋子都、著於竹帛。子夏は『春秋』を公羊高に傳授し、高はその子平に傳授し、平はその子地に傳授し、地はその子敢に傳授し、敢はその子壽に傳授した。前漢の景帝の頃、公羊壽はようやく齊人である弟子胡毋子都とともに、竹簡帛書として書き記した。

前漢景帝期まで『春秋公羊傳』は口傳されておき、書物としては定着していなかった。それゆえ公羊壽が書いた『春秋公羊傳』には口傳時代の先師の説が疊層的に蓄積されており、個人の責任を明らかにし難いようである。また『周易』についていうと、近年湖南省の馬王堆前漢初期墓から出土した『周易』と、通行本のそれには重大な差異が存在し、出土本は『易』の本文が定着する以前の様相を示すものと思わ

れる。このように前漢時代において書物は固定的なものではなく常に流動的で、容易に増補、改變されるような性質のものであった。

(5) いうまでもないが、前漢の孔安國に假託された『尚書序』「古文孝經序」などは西晉時代以降の產物であり、無論前漢のものではない。また淮南子劉安に『離騷』注釋の序文があったとする説もあるが、私見によればそうとは斷定し難い。これについては後述する。

(6) 孫爽『孟子正義』に引く唐の張鎰(孟子音義)は『孟子題辭、即序也。趙注尚異、故不謂之序而謂之題辭』という。

(7) はほぼ同じ問題意識を持つものとして、内山直樹「序文、目付、署名」『呂氏春秋』序意篇について(『中國哲學研究』第一一號、一九九九年)は、「戰國秦漢期における書物形成の形態の變遷、またそれともなう書物觀の變遷について考える上で、序意篇は恰好の題材を提供する」(序)として『呂氏春秋』序意篇を特に取り上げ、「書物史上のある轉換、學術の舞臺に(『呂氏春秋』という)書物がそれまでとは異なる意味を擔って登場してくる轉換に、序文の發生は密接に關わっていると考えられる」(序)として、序意篇が『呂氏春秋』に與えた意味を仔細に考察している。

(8) 王利器『莊子』郭象序的真偽問題(『哲學研究』第九期、一九七八年)、及び「再論『莊子』郭象序的真偽問題」(一九七九年、のち、兩篇とも『晚傳書齋文史論集』、中文大學出版社、一九八九年、に收録)も、結論的にいつて高山寺本末尾の一文が郭象序であるとす。また、拙稿「郭象による『莊子』刪定」(『東方學』第九一輯、一九九六年)を参照いただきたい。

(9) たとえば清朝を代表する目錄學者、章學誠ですら「劉歆『七略』亡矣、其義例之可見者、班固藝文志注而已」(『校讐通義』卷一、「互著」といつて『漢書』藝文志の分析に終始していることから分かる通り、乾嘉時期にも劉向『別錄』の内容は十分に把握されておらず、『別錄』研究は漢志に基づく段階にとどまっていた。

- (10) 姚名達『中國目錄學史』(商務印書館、一九三八年)、溯源篇、劉向等寫定叙録之義例。
- (11) 姚振宗『七畧別錄佚文』、『師石山房叢書』所收。
- (12) 余嘉錫『目錄學發微』(巴蜀書社、一九九一年)四、目錄書體制二、「叙録」。
- (13) この書式は劉歆が記した「叙録」の場合も同様であつたらしく、その手になる「山海經叙録」には「侍中奉車都尉、光祿大夫臣秀領校秘書言」とある。劉歆は建平元年(紀元前六年)に改名して劉秀と名乗つた。
- (14) 余嘉錫前掲書、四、目錄書體制二、「叙録」には「次のように考える人もあろう、正史の傳などは誰でも熟知しているものであり、わざわざ叙録に記す必要もないのではないか、と。これは劉向當時は、『太史公書』が民間の家々で學習されている現在と異なり同書が普及しておらず、それ故に叙録中に書かざるを得なかつた狀況を知らないのだ」とある。
- (15) ただし現行本『史記』と違ひがある。『史記』卷六三、莊子列傳には「莊子者、蒙人也、名周。周嘗爲蒙漆園吏。與梁惠王、生宣王同時者也」とある。
- (16) 『史記』卷六五、孫子列傳には「孫子武者、齊人也。以兵法見於吳王闔廬。闔廬曰『子之十三篇、吾盡觀之矣、可以小試勦兵乎?』」對曰「可」。闔廬曰「可試以婦人乎?」曰「可」。於是許之、出宮中美女、得百八十人。……於是闔廬知孫子能用兵、卒以爲將」とある。
- (17) たとえば「晏子叙録」の冒頭には、「内篇諫上第一」以下、八篇の目録が見える。「列子叙録」も同様で、しかも『文選』李注ではその「叙録」を「列子目録」と呼んでいる(余嘉錫前掲書)。また劉歆が執筆したものととしては「山海經叙録」にも目録が見える。
- (18) 「叙録」はまた「書録」と呼ばれることもある。また「序奏」と呼ばれ後世に傳わっている例もある。たとえば、『說苑』の傳本には劉向の叙録が冠されているが、それは「說苑序奏」となっている。本稿では混亂を避け、必要な場合以外は「叙録」という語を用いる。
- (19) 姚名達前掲書、溯源篇、「別録」與「七畧」之體制不同、を參照。ただし、「七畧」は劉向の死後まもなく完成したので、もちろん劉向存命中にも大まかな分類があつたはずである。
- (20) 「七畧」を「別録」の節畧と見る學者もある。姚名達前掲書、溯源篇、「別録」與「七畧」之體制不同、には「まず『別録』があり後に『七畧』ができ、『七畧』は『別録』を摘録してなしたものである。それゆえ『別録』が詳しく『七畧』が簡畧なのである」と。
- (21) 姚振宗前掲書、叙新編七畧別録、參照。
- (22) 南朝梁の阮孝緒「七錄序」に「昔劉向校書、輒爲一錄。論其指歸、辨其訛謬、隨竟奏上、皆載在本書。時又別集衆錄、謂之『別録』、即今之『別録』是也。子歆撮其指要、著爲『七畧』」(『廣弘明集』卷三)とあるのがそれである。
- (23) 姚振宗前掲書、叙新編七畧別録、には「劉向は校書の業を終えるに至らなかつたのであるから、『別録』が(劉向の手により)成立したはずはない」と。
- (24) 姚振宗前掲書、叙新編七畧別録、參照。
- (25) 顏師古は「輯畧」を説明して「輯は集と同じ。複數の書物についてとりまとめて要點を述べた、という事(輯與集同、謂諸書之總要)」という(『漢書』藝文志注)。
- (26) 姚振宗前掲書、叙新編七畧別録には「傳えられた二十卷は、おそらく劉歆が『七畧』を奏上した時に完成させたのであろう。『七畧別録』という名は、『七畧』の別にこの録がある、という意味」と。ただ編集人を劉歆に特定するには及ばぬであらう。また「別録」の「別」が、「七畧」の別という意味ではないこと、姚名達前掲書、溯源篇、「別録」與「七畧」之體制不同、に指摘がある。
- (27) 胡楚生『中國目錄學』(文史哲出版社、中華民國八四年)第二章第二節

では『別録』の文章はすべて劉向の手になるが、一つの書物に編集したのは當時の誰かの仕事で、必ずしも劉向自身のわざではない」とするが、上記の理由から、『別録』の文章がすべて劉向の撰であるとの説には同意できない。

(28) 『七畧』に見える諸書を「六畧」と呼ぶ理由について、沈欽韓は「其輯畧即彙別群書、標列指趣、若『志』之小序、實止六畧耳」といっている（『論衡校釋』に引く沈説）。

(29) 劉盼遂は『子草書錄序奏』者、蓋劉向劉歆校上『錄』『畧』之文歟」といっている（『論衡集解』古籍出版社、一九五七年）。上の注に述べた通り、『叙錄』が「序奏」と呼ばれている例もあるので、「子草叙錄序奏」というのが劉向によるこの一文の名稱だと思われる。なお通行の『論衡』諸本では「序奏」を「序奏」と誤っている。

(30) 『風俗通義』のこの佚文は古くから知られていたが、どこまでが『別録』の引用なのか、學者の意見が分かれている。ここでは「殺青」と「可繕寫」の二語のみを『別録』佚文と見る余嘉錫『書冊制度補考』（『余嘉錫論學雜著』、中華書局、一九六三年、所收）の説に従う。

(31) 『漢書』藝文志の六藝畧、禮類の『周官經』六篇の班固自注は「王莽時劉歆置博士」。顔注に「即今之『周官禮』也。亡其『冬官』、以『考工記』充之」と。顔師古も『別録』か『七畧』を見て注したのであろう。

(32) 姚振宗『七畧別錄佚文』（前掲）は『別録』においては『禮記』百三十一篇がすべて一律に分別されそれぞれの分類に属していたはずで、鄭玄が記録した四十三篇のみを分類したわけではあるまい」という。

(33) 『中興館閣書目』に劉向を引いて「其學本於黃老、大較刑名家也。居稷下、與宋鈃・彭蒙・田駢等同學於公孫龍」（見『玉海』卷五三）とある。内容から見て、「尹文子序」と『中興書目』が引く劉向説は、ともに『別録』または『七畧』からの引用であろう。

(34) 余嘉錫『目錄學發微』二、目錄釋名、に『別録』はそれぞれの書物

の録を集めて一編としたもので、それぞれの書物とは別行した。『四庫全書』にまず提要があり、後に編集して『四庫全書總目』としたようなものである」と。

(35) 顔師古は漢志の『淮南外』に注して「内篇論道、外篇雜説」というので、漢志の『淮南外』が、高誘のいう『淮南外篇』と内容的に別個の書を指すとは考えられない。

(36) 内山氏、前掲論文の第四章に、この『淮南外』の分量が不安定であったことにつき、その原因を序文の不在に求めつつ、「等しく淮南王劉安の手に出るにも関わらず、『外書』の流動的なことは『内書』の安定的なことと対照的である」と述べる。

(37) 『淮南子』の末には、同書の序文ともみなすべき「要畧」篇があるが、この篇には「要畧」篇以外の二十篇の篇名が既に見える。その二十篇に「要畧」篇を加えた二十一篇が『淮南子』成書當初からの姿であったらしく、二十一篇本以外の『淮南子』傳本は知られていない。内山氏、前掲論文、第四章、参照。故に高誘本が二十一篇だからといって、それが劉氏校定本に依據したとはいえない。

(38) 加賀榮治『中國古典解釋史・魏晉篇』（勁草書房、一九六四年）は後漢の經學では單なる師説の祖述を拒否したことを述べ、「もともと『傳』・『注』は、西漢今文學の『章句』に對立するものであり、その批判否定として作成されたものである。したがって、『傳』・『注』は、『章句』作成の基本態度である、師説の繼承増飾によって作られたものではない」（同書、まえがき）という。

(39) 『論衡』書解篇に「著作者爲文儒、說經者爲世儒」とある。

(40) 「非事可析第」は讀み難い。劉盼遂『論衡集解』に引く吳承仕説に「非事二字、疑誤」という。なお吳氏の説は吳承仕『論衡校釋』（北京師範大學出版社、一九八六年）には見えない。

(41) 『論衡』に見える「世儒」「文儒」の二分については、「世儒」すなわち今文學派、「文儒」すなわち古文學派、と圖式的にとらえる事も一應可

能である。しかし「今文」學者の劉向も書解篇では「文儒」とされているなど、單純化は難しい。本稿では「文儒」の師資相承を前提とせず、書物を媒介として學問を伝えようとする側面を強調しておきたい。

(42) 蔣天樞は、前漢時代の注釋形態のうち、「故」や「傳」は確かに經文と別に單行していたが、「章句」は經文と併せて書かれていたと主張している(『論楚辭章句』、『楚辭論文集』、陝西人民出版社、一九八二年、所收)。その證據として、『漢書』卷七五、夏侯勝傳に見える夏侯建の傳記に「從五經諸儒問與『尚書』相出入者、牽引以次章句、具文飾說」とあるのを挙げ、「具文飾說」とは經と章句の合併をいうとするが、確論とはいえない。前漢の「章句」は傳わっておらず、現在知られる「章句」形式の注釋の實例は王逸『楚辭章句』と趙岐『孟子章句』で、ともに後漢に成立した書物である。蔣氏は兩書に基づき「章句」の特徴を論じたが、それは「章句」の後漢的展開を示すに過ぎない。

(43) 現存する注釋書の中には、もともと經と注とが別行していたものの、後に合併されたものも相當數あると考えられるので、現行本の注釋形態に依據して議論するのは危険である。以下に挙げるのは、序文中に經注合併が明記しており、注釋の成立當初から經注が一書にまとめられていたと考えられるもののみである。

(44) しかし例えば『春秋左氏傳』の場合、西晉の杜預が『春秋』と『左氏傳』とを「集解」するまで、兩者が別行していたようであるから、既存の經と傳とが相變らず別々に後漢學術界に通行していたものもあったろうし、新しく注釋をつくる學者のうちにも經と離れて注を書く者がいた可能性はある。漢代が終わるまでに、注の單行という現象がまったく減びてしまったとまでは斷言できない。

(45) 馬宗霍『中國經學史』(臺灣商務印書館、一九六八年)、第七篇「魏晉之經學」には「董遇と賈洪とともに『左氏傳』に通じており、董遇は朱墨の筆で違いを分かち、經學において新たな手法を開發した」とある。

る。この朱と墨の二色を用いて注釋書をまとめる手法は西晉時代の春秋學者劉兆にも受け繼がれた。『晉書』卷九一、儒林傳、劉兆傳には「爲『春秋左氏傳』解、名曰『全綜』、『公羊』、『穀梁』解詁、皆納經傳中、朱書以別之」とある。

しかしながら、劉炫が孔安國「古文孝經序」のこの部分を解して「經傳不相分辨、故朱墨爲別。後漢以來、注書者皆以粗細爲異、時人因以粗細寫之、粗細既便於事、故不復改用朱墨」(『孝經述議』卷一)といっているように、經と注とを朱墨で書き分ける工夫は、少なくとも北朝においては、隋までに既に廢れてしまったらしい。ただし、梁の陶弘景が『眞誥』『周氏冥通記』において注を朱書するなど、南朝にあってはこの習慣が存続していた可能性はある。なお陸德明『經典釋文』叙例に「今以墨書經本、朱字辯注、用相分別、使較然可求」とあるのは音義の見出しについて經を墨書、注を朱書したというものであり、自ずからまた別の工夫に屬すであろう。

(46) 王念孫『讀書雜誌』卷四、「漢書」九、「離騷傳」。

(47) 章炳麟『檢論』卷二、「徵『七略』」。

(48) 『目錄學發微』卷二。

(49) 楊樹達『漢書窺管』(上海古籍出版社、一九八四年)に説が見える。その他、楊樹達「離騷傳與離騷賦」と題する論文があるが、未見(『光明日報』一九五一年五月、『積微居小學述林』所收)。

なお小南一郎は、劉安の著作として「離騷賦」であったとする説と、「離騷傳」であったとする説のふたつの傳承が、早い時期から行われていた事實自體に着目し、「傳」なのか「賦(傳)」なのかの二者擇一の論争には立ち入らず、「後漢時代に傳えられていた劉安の離騷章句は、この兩側面を兼ね備えていた」という可能性を指摘している(『王逸『楚辭章句』をめぐる』、『東方學報』京都第六三冊、一九九一年三月)。

(50) 『楚辭』の傳授の歴史を王念孫は考慮していないと、すでに余氏が批判



(51) した(前掲、『目錄學發微』)。  
たとえば『周易』繫辭下傳には次のようにある。

『易』之興也、其中古乎? 作『易』者、其有憂患乎?

『易』が生まれたのは中古の時代であろうか。『易』を制作した人  
には懊惱があったのだろうか。

また次のようにもある。

『易』之爲書也、廣大悉備、有天道焉、有人道焉、有地道焉。

書物としての『易』は、廣く世界を覆いすべてを備えており、天  
道を含み、人道を含み、そして地道を含んでいる。

(52) 王逸の傳記については蔣天樞『後漢書・王逸傳』考釋の詳しい考證  
がある(前掲『楚辭論文集』所收)。ここでは王逸の生年が、建初元年  
(七二)と假定されている。

(53) 小南氏は、王逸に先立つ『楚辭』注釋の流れを大きく二つに分ける。

一は「主として漢の國都で、皇帝や宮廷の文人たちに愛好され、一流  
の學者たちがその注釋に關わっていた楚辭文學の流れ」であり、一は  
「楚文化が色濃く遺存する地域」で行われた「楚辭傳承の流れ」であ  
り、これは「多分に主觀的で、地域文化至上主義的な傾向」のものだ  
であったという(前掲、『王逸『楚辭章句』をめぐって』。序文のみに着  
目するというならば、劉安、班固などから王逸が受け継いだのは、前者  
すなわち皇帝や宮廷文人たちに愛好された『楚辭』文學の流れに他な  
らないといえるであろう。

(54) 漢賦において、賦の作者自身が序を書いた例を『文選』から挙げると、  
揚雄「甘泉賦」(卷七)、同「羽獵賦」(卷八)などがある。また『文選』  
卷一に收める、班固その人の「兩都賦」にも自序が見える。

(55) なお班固「兩都賦序」は無論、一篇の賦の序ではなく、「西都賦」「東  
都賦」二篇の賦に對して附された序である。

(56) 後漢の經學家として知られる賈逵(三〇—一〇二)も『離騷經章句』  
をものし(王逸「離騷後叙」、馬融も「離騷」に注をつけた(『後漢書』  
卷六〇上、本傳)。兩書はすでに佚しており詳細は不明であるが、この  
周邊に經學と『楚辭』傳承との接點が存在している可能性もある。

(57) なお、前掲の蔣天樞『後漢書・王逸傳』考釋によると、王逸が校書  
郎であったのは、安帝初年、大規模な「東觀校書」が行われた時期と  
見られ、この校書には馬融が参加しており(『後漢書』劉珍傳)、また、  
王逸と馬融の兩人は『東觀漢記』の編纂に關與していた可能性が強い  
という。本稿では、注釋書の序文の發生に關して、特にこの二人の創  
意なり協力なりを主張するつもりはないが、王逸と馬融が、時代的に  
も環境的にもある程度のもを共有していた事は疑いないであろう。

(58) ただし、私は王逸の基づいた『楚辭』テキストが、劉向の編纂にかか  
るものと主張したいわけではない。王逸依據本が劉向整理本そのも  
のとは考えられない件については、淺野通有「漢代の楚辭——『楚辭章  
句』成立への過程」(『漢文學學會報』第一四輯、一九六八年)を参照。  
趙翼の説は『陔餘叢考』卷二二、「序」の項に見える。

(附記) 本稿は、第四二回國際東方學者會議における「劉向「叙錄」と後  
漢魏晉の注釋家の序文」(一九九七年五月三〇日、於日本國立教育會館)  
と題した研究發表を基礎として執筆し、その後、一九九八年一二月に博  
士學位申請論文として東京大學に提出した「漢魏兩晉注釋學と『莊子』  
郭象注」(一九九九年三月、學位取得)に第一章として收録した同  
名の論文に、加筆修正を施してなったものである。